

多賀城市文化財調査報告書第24集

市川橋遺跡

—平成元年度発掘調査報告書—

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

市川橋遺跡

—平成元年度発掘調査報告書—

序

多賀城市は、東北地方の中核都市仙台市に隣接し、近年いちじるしく人口が増加しております。当市は、「史都・多賀城」をスローガンに特別史跡の整備・復元と、史跡と調和するまちづくりに努めています。

しかし、国府多賀城を取り巻く周辺地域では、近年、小規模な宅地開発が増加してきており、当センターでは毎年数ヶ所の発掘調査を実施しております。

さて、今回発掘調査が実施した市川橋遺跡からは、平安時代の水田跡と居住地を広げた整地層、そして建物跡や溝跡が発見され、また、出土した土器類の中には、墨書きされた土器が多くありました。多賀城跡を取り巻く集落を解明するうえで、貴重な資料となるものと思われます。

本報告が多少なりとも市民の文化財に対する啓蒙の一助となれば幸いです。

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

1. 本書は、平成元年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、市川橋遺跡の第8次調査と第9次調査にあたり、第8次調査を「IB-8」、第9次調査を「IB-9」の略称を用いて記録している。
3. 本書の執筆・編集は、文化財保護係職員の協力を得て、淹口 卓が担当した。
4. 本書の作成にあたっては、佐藤悦子、菊池 豊、山田紀子、柏倉霧代、須藤美智子、熊谷 純子、黒田啓子、木村梅子、小野寺恵子、平山節子、赤間かつ子、阿部トシ子、高野敦子、角田静子、渡辺ゆき子の協力を得た。
5. プラント・オパール分析は、〈有〉古環境研究所(埼玉県大宮市所在)に依頼した。
6. 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
7. 調査及び遺物の整理において、下記の方々に御助言・御協力を賜わった。
桑原滋郎、高野芳宏(宮城県多賀城跡研究所)、佐藤和彦(多賀城市立第二中学校)
8. 本書の土色については、「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄:1976)を使用した。
9. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

調査体制

調査体制は、次のとおりである。

多賀城市教育委員会 教育長 横井 茂男

○社会教育課文化財保護係

社会教育課長 名取 恒郎

主幹兼文化財

保護係長 大場 義男

主　　益吉 大場 正彦

主　　益六 伊藤 重八(1月配置実)

社会教育主事 伊藤 建朗

○埋蔵文化財調査センター

所　　長 斎藤 一司

主任研究員 高倉 敏明

研究員 淹口 卓

石川 俊英

技　　師 石本 敬

千葉 孝弥

相澤 清利

嘱　　託 錦木 久夫

淹川ちか子

調査要項

〈第8次調査〉

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎字水入46番2
2. 調査期間：平成元年5月15日～7月14日
3. 調査面積：434m²（対象面積925.70m²）
4. 調査協力者：竹谷英昭、沖井康仁、今野征勝（地権者）、多賀城市第二学校給食センター
5. 調査参加者：井口祐二（調査補助員）、加藤文一、加藤昭一、菅野文夫、大場正司、佐々木忠志、富樫 章、赤間かつ子、小野寺恵子、平山節子、木村梅子、秋山悦子、伊藤多鶴子

〈第9次調査〉

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市浮島字高平14番
2. 調査期間：平成元年9月18日～12月25日
3. 調査面積：480m²（対象面積1,020m²）
4. 調査協力者：加藤 基、木代 聰（地権者）、多賀城市第二学校給食センター
5. 調査参加者：菊池 畏（調査補助員）、大場正司、加藤昭一、菅野文夫、佐々木四郎、水越朝治、松本喜一、芦野しづ子、阿部けい子、阿部敏子、阿部美智子、遠藤 一代、大友良子、小野玉乃、大山貞子、菅野恵子、熊谷あつ子、桜井エイ子、菅原絹代、高野敏子、武田リキ、角田静子、渡辺園恵

本文目次

序文	
例言	
調査体制	
調査要項	
市川橋遺跡の立地と環境	1
第8次調査	3
I. 調査に至る経緯	3
II. 調査方法と経過	3
III. 調査成果	4
〈基本層位〉	4
〈発見遺構と遺物〉	7
〈堆積層出土遺物〉	23
IV. まとめ	25
第9次調査	35
I. 調査に至る経緯	35
II. 調査方法と経過	35
III. 調査成果	36
〈基本層位〉	36
〈発見遺構と遺物〉	36
IV. まとめ	58
V. プラントオバール分析報告	61

市川橋遺跡の立地と環境

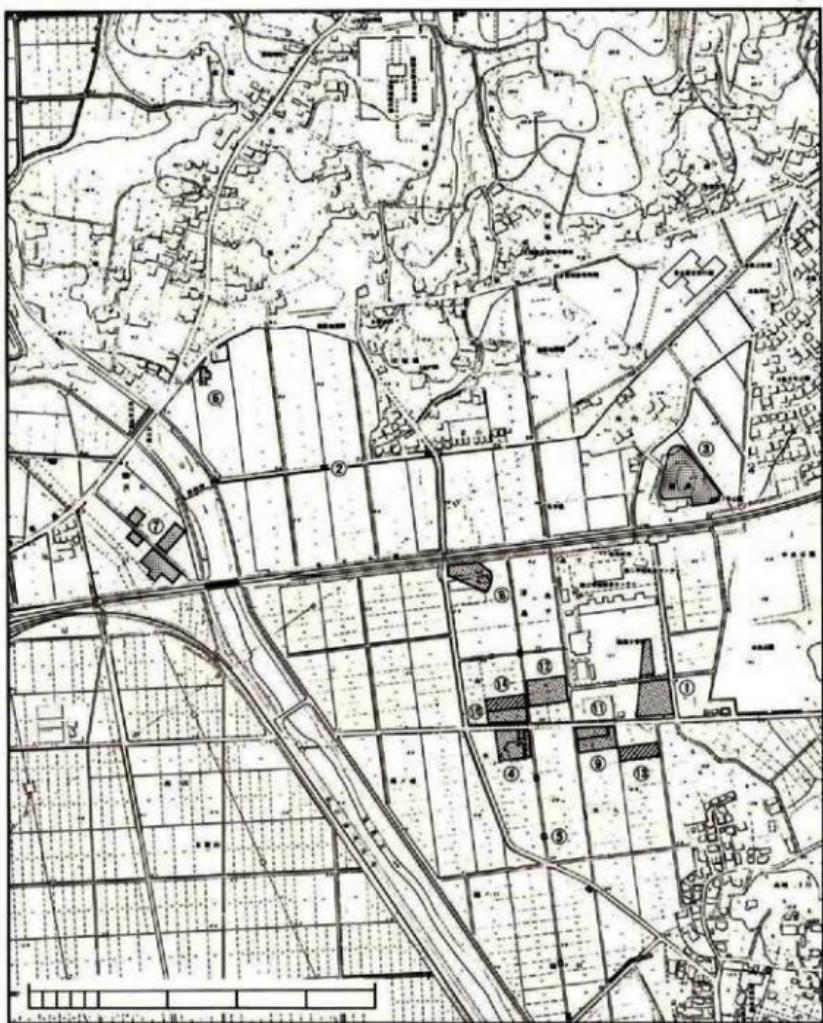
市川橋遺跡は、多賀城市市川・浮島・高崎地区に所在し、特別史跡多賀城跡の西側から南側一帯にかけて位置している。本遺跡は、多賀城を二分して流れる砂押川によって形成された標高2~3mの自然堤防上に立地し、南北1.6km、東西1.4kmの広範囲にわたる遺跡である。

本遺跡は、奈良・平安時代の遺跡であり、これまでに実施された発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡等が検出され、また、市川字伏石地区や浮島字高平地区では、平安時代の水田跡が検出されている。本遺跡をはじめとし、多賀城跡の周辺遺跡は、国府多賀城を取り巻く大規模な集落を構成する遺跡で、「多賀城」の国府城を考える上で重要な遺跡である。

なお、これまでの本遺跡の調査成果については、下表のとおりである。

調査年次	調査地区	おもな成果		年代	原因
		検出遺構	出土遺物		
多賀城跡 第22次調査 (昭和8年度)	浮島字高平	掘立柱建物跡、窓穴壁跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、土製カマド	平安時代	城南小学校建設(註1)
昭和53年度	市川字伏石、 越前、高崎字 堀ノ口	溝跡	土師器、須恵器、瓦、焼 盤車	古墳時代後期	仙塩流域下水道事業 (註2)
昭和54年度	高崎字水入、 堀ノ口	掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土塁	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、赤焼き土器、瓦、硯、木製品	平安時代	第二電送電話交換局建 設(註3)
浮島字高平、 高崎字水入、 堀ノ口	浮島字高平、 高崎字水入、 堀ノ口	掘立柱建物跡、溝跡	土師器、須恵器	平安時代	下水道埋設工事
多賀城跡 第37次調査 (昭和56年度)	市川字越前	掘立柱建物跡、一本柱列 跡、道路状遺構、井戸跡、 土塁	土師器、須恵器、須恵瓦 土器、灰釉陶器、綠釉陶器、 青磁、白磁、瓦、硯、木製品、 鉄製品、古鏡	奈良・平安時 代	(註4)
第1次調査 (昭和56年度)	市川字伏石	水田跡、道路状遺構、溝 跡	土師器、須恵器、赤焼き土 器、灰釉陶器、綠釉陶器、 瓦	平安時代	宅地造成工事(註5)
第2次調査 (昭和57年度)	市川字伏石	水田跡、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土 器、灰釉陶器、綠釉陶器	平安時代	宅地造成工事(註6)
第3次調査 (昭和58年度)	浮島字高平 (大臣宮)	掘立柱建物跡	土師器、須恵器、赤焼き 土器、瓦、石器	平安時代	宅地造成工事(註7)
第4次調査 (昭和58年度)	高崎字水入	溝跡	土師器、須恵器、赤焼き 土器、灰釉陶器、綠釉陶器、 瓦、木製品	平安時代	宅地造成工事(註8)
第5次調査 (昭和59年度)	浮島字高平	掘立柱建物跡、一本柱列 跡、溝跡、土塁、水田跡	土師器、須恵器、赤焼き 土器、灰釉陶器、綠釉陶器、 瓦、木製品、鉄製品	平安時代	宅地造成工事(註9)
第6次調査 (昭和60年度)	高崎字水入	溝跡、土塁	土師器、須恵器、灰釉陶器、 綠釉陶器、瓦、硯、木製品	平安時代~近世	宅地造成工事(註10)
第7次調査 (平成2年度)	浮島字高平	井戸跡、土塁、溝跡、水 田跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、 綠釉陶器、瓦、硯、木製品、 漆文瓦	平安時代	宅地造成工事

第1表 市川橋遺跡調査年次・成果表



No.	調査名 称	調査年次	No.	調査名 称	調査年次
①	多賀城跡第22次調査	昭和48年	⑥	市教委第3次調査	昭和58年
②	仙臺城下水道試掘調査	昭和53年	⑦	市教委第4次調査	昭和58年
③	館前通り跡発掘調査	昭和54年	⑧	市教委第5次調査	昭和59年
④	水入通り跡発掘調査	昭和54年	⑨	市教委第6次調査	昭和61年
⑤	下水道埋設工事試掘調査	昭和55年	⑩	市教委第7次調査	昭和61年
⑥	多賀城跡第37次調査	昭和55年	⑪	市教委第8次調査	昭和61年
⑦	市教委第1・2次調査	昭和56・57年	⑫	市教委第9次調査	昭和61年

第1図 調査区位置図

市川橋遺跡第8次調査

I 調査に至る経緯

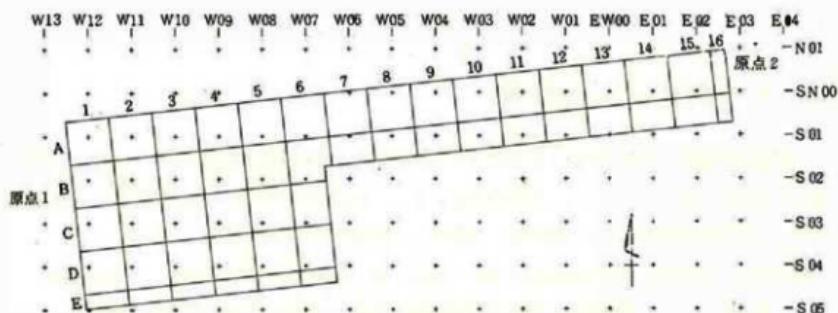
本遺跡の所在する市川・浮島・高崎地区の水田地帯は、近年小規模開発が徐々に増加し、宅地化の傾向が強まつてきている。市教育委員会では、多賀城跡を取り巻く周辺の遺跡の重要性を考え、昭和54年度以降、小規模開発に対応するため継続的な調査を実施してきた。

本調査は、平成元年2月に地権者から宅地造成工事の計画が提示されたため、その内容等について協議を行った。当該地は、平安時代の溝跡や多量の土器類や木製品が出土した第4・5次調査の東南に隣接する位置にあたり、さらに近接する地域でも集落跡や水田跡が確認されていることから、当該地においても同様な遺構が存在する可能性が考えられていた。このため地権者に対し調査の協力を依頼し、平成元年2月に発掘調査の承諾を受けて、5月15日から調査を実施したものである。

II 調査方法と経過

今回の発掘調査は、調査予定地が水田であるため、水田の地形にそって調査区を設定した。その際に、調査区の西側に隣接する第4次調査において、平安時代の溝跡や多量の土器類・木製品が発見されていることを考慮し、調査区の西側を広げた。調査対象面積は925m²でその内の434m²について調査を実施した。調査は、平成元年5月15日より開始した。まず、調査区に隣接する地域が水田で耕作されているため、調査区内の水貯き作業を行い、翌日から重機による表土剥離を行った。また、排水溝を兼ねた土層観察用のトレンチを掘り込んだ。調査区の東側において、整地層を検出し、整地層上面での遺構検出作業を行い、土塗、溝跡、ビット等を検出す。西側では、第Ⅲ層の掘り込みを行い、畦畔を検出す。整地層6上面で検出した遺構の掘り込み調査を行い、並行しながら実測図作成のため、原点1(X:-189,236.766, Y:14,210.139)と原点2(X:-189,246.213, Y:14,161.269)を基準とし、造り方を設定する(6月8日)。造り方水系高は、標高3,000mである。整地層6上面において検出した遺構の平面図及びセクション図作成を行い、6月14日に全景写真を撮影する。西側では、第Ⅶ層上面で遺構検出作業を行い、灰白色火山灰を含む溝跡や土塗を検出し、重複関係を確認した後に掘り込み調査を行った。6月29日からは、整地層を掘り込み、地山面での遺構検出を行い、土塗を検出し、掘り込み調査を行う。7月11日に最終の全景写真を撮影し、7月13日ですべて

の調査を終了した。



第2図 調査区設定図

III 調査成 果

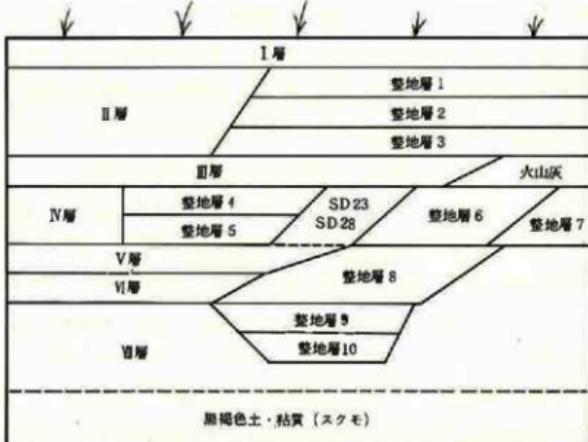
〈基本層位〉

第Ⅰ層 現在の水田耕作土で灰色の粘土質からなる。層厚は、10~20cmを計る。

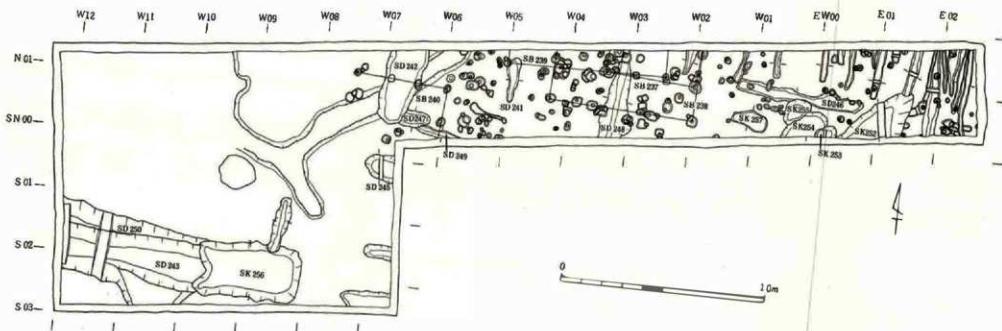
第Ⅱ層 褐灰色の粘土質で、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~15cmを計り、酸化鉄が帶状に層全体に認められる。

第Ⅲ層 黄灰色の粘土質で、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~15cmを計り、黒褐色土をブロック状に部分的に含み、さらにマンガン粒をも多量に含む。

第Ⅳ層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、全体的に酸化鉄の集積がみられ、また、マンガン粒をも多量に含む。さらに上層では、炭



第3図 基本層位模式図



第4圖 遺構配置圖

化物を小ブロック状に含む。

第V層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の北西部に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、第IV層との層界は起伏がある。灰白色火山灰を層全体にブロック状に含む。

第VI層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、部分的にグライ化している。

〈発見遺構と遺物〉

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡29条、土塹5基、水田跡、整地層があり、この他に多数の柱穴を検出した。

(1) 整 地 層

整地層は、調査区の中央部付近から東側一帯にかけて検出され、10層に細分化される。

整地層1 A・B-04、C・D-05、E-06グリットから調査区の東側にかけて堆積する。にぶい黄褐色のシルト層で、層厚は3~6cmを計り、層中には、暗灰黄色土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

整地層2 西側は整地層1と同じラインからA・B-11グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は5~20cmを計る。層中には、褐灰色土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

整地層3 B-06~11グリットにかけて堆積する。黄褐色のシルト層で、層厚は5~20cmを計り、層中には、炭化物が多量に含まれる。

整地層4 A~E-04~06グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は5~15cmを計り、層中には、黄灰色の粘質土をブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

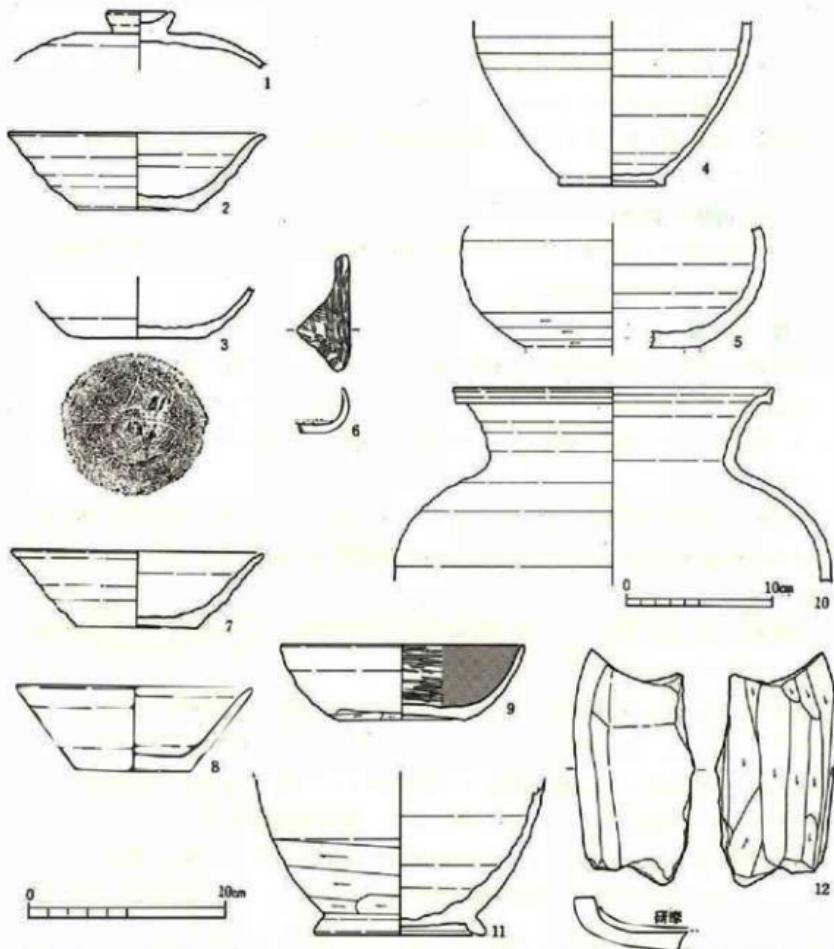
整地層5 整地層4と同範囲に堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は5~20cmを計り、層中には、焼土や黄色土をブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

整地層6 A・B-06~13グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は3~15cmを計り、層中には、褐色土・黄色土・焼土をブロック状に含み、また、炭化物をも多量に含まれる。セクションを観察すると、上層に灰白色火山灰が堆積している。

整地層7 A・B-03グリットから調査区の東側へ帶にかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は10~20cmを計り、層中には、黄橙色土や黄褐色土を小ブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

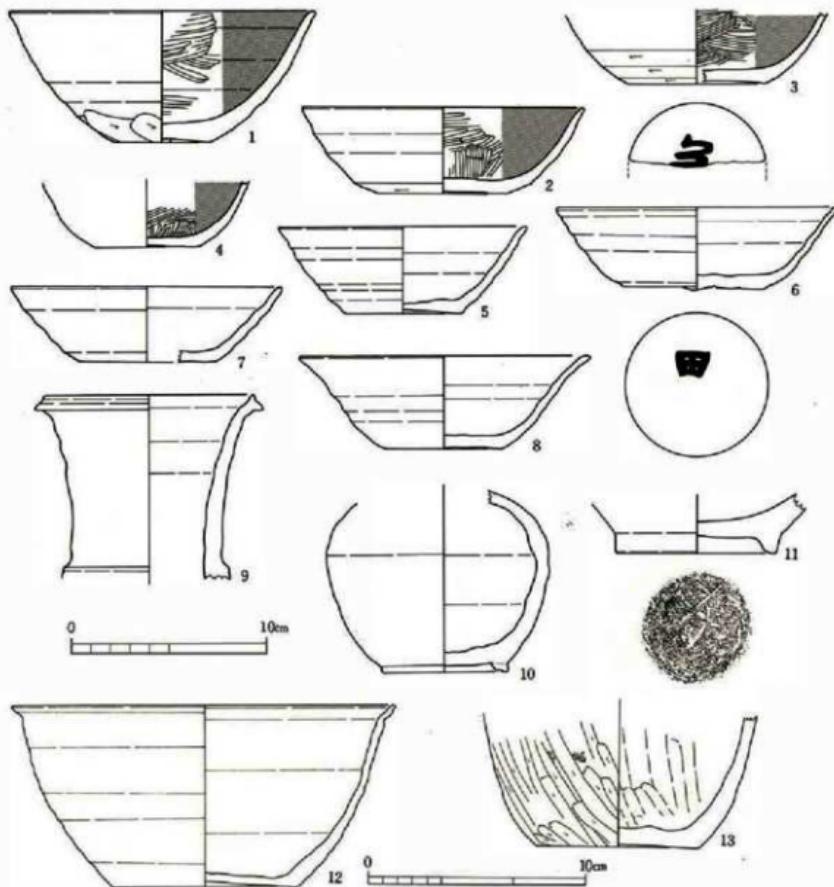
整地層8 A・B-06~13グリットにかけて堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は2~10cmを計り、層中には、炭化物や黄色土が含まれる。

整地層9 A・B-07・08グリットにかけて堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は3~5cmを計り、層中には、炭化物が少量含まれる。



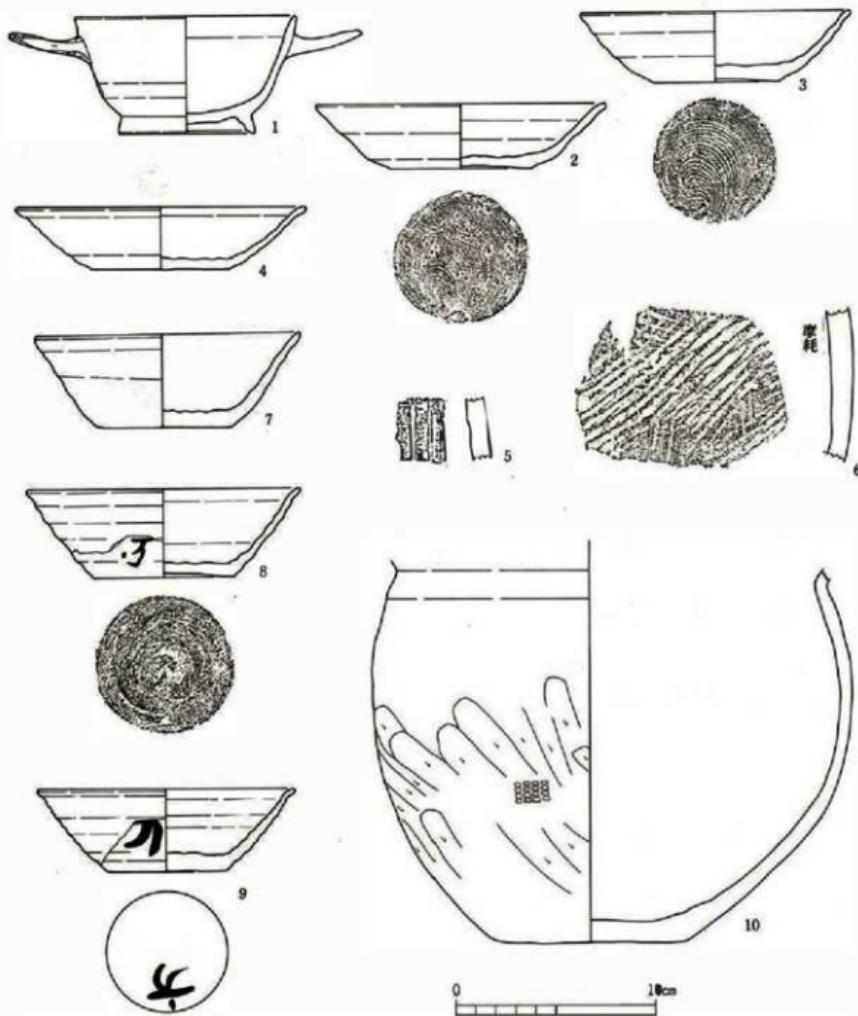
No.	用 住	種 類	形 式	外 因 面 製 作	内 面 製 作	口 径	底 径	高 度	備 考
1	愛地厚1	須恵器	盤	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	*			
2	愛地厚3	*	杯	*	底部回転ヘタ切り				
3	*	*	*	*	底部回転ヘタ切りのちナデ				
4	*	*	長頸瓶	*	回転ヘラケズリ				
5	*	*	短頸瓶	*	*				
6	愛地厚5	土師器	耳 盆	ヘラミガキ黒色處理、底部回転ヘタ切り	ヘラミガキ、黒色處理				
7	*	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘタ切り	ロクロナデ	(12.8)	6.0	3.8	
8	愛地厚6	*	杯	*	*	12.0	6.0	4.3	
9	*	土師器	杯	ロクロナデ、手持ヘラケズリ、底部回転ヘタ切り	ヘラミガキ、黒色處理	(12.3)	6.3	3.8	
10	*	須恵器	更	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部回転ヘタ切り	ロクロナデ	(21.9)	6.7		
11	*	*	長頸瓶	ナデのち断筆	手持ヘラケズリ				
12	*	*	底字鏡		研摩				

第5図 セイチ1・3・5・6層出土遺物



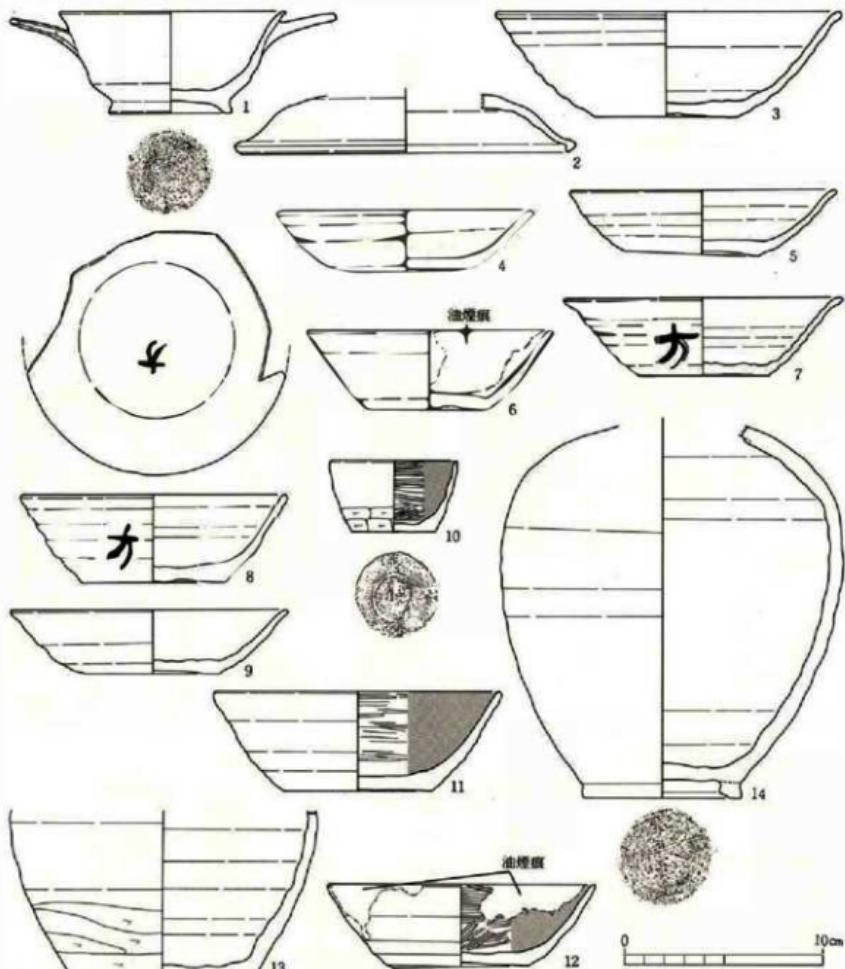
No.	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	土師器	杯	ロクロナ 底端回転切り、底部下端~底部周縁手持ヘラケズリ	ロクロナデ 部ヘラミガキ、黑色燒付	(15.6)	(5.0)	6.6	
2	*	*	底端回転ヘラ切り、底部下端~底部周縁ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色燒付	(14.4)		4.4	
3	*	*	* *底部下端~底部周縁ヘラケズリ	*			(7.0)	
4	*	*	* 底部回転糸切り	*			5.5	
5	須恵器	*	*	ロクロナデ	(12.6)	(6.0)	4.4	
6	*	*	底部回転ヘラ切り	*	14.2	7.2	4.2	
7	*	*	*	*	(13.8)	(7.0)	3.8	外底部墨書き「田」
8	*	*	底部回転糸切り	*	(14.6)	6.0	4.7	
9	*	長頸瓶	*	*	11.6			
10	*	*	*	*			11.3	
11	*	*	* *底部回転糸切りのちナデ	ナデ				
12	*	釜	* *底部不明	ロクロナデ	26.5	12.7	12.5	底部ヘラ盛り 外底部に付着物
13	*	甕	平行叩きのち手持ヘラケズリ 底部ナデ	ナデ			11.2	

第6図 セイチ4層出土遺物



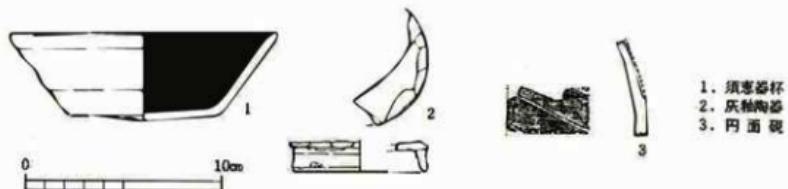
No.	層位	種類	形	外面	内面	口径	底径	高さ	備考
1	表地層7	須恵器	瓦耳杯	ロクロナギ、耳部手附へラケズリ、底削回転へラ切り	ロクロナギ	(11.0)	6.4	5.8	
2	表地層8	*	杯	* 底削回転系切り	*	(14.4)	7.0	3.2	
3	*	*	*	*	*	(13.6)	6.2	3.5	
4	*	*	*	* 底削回転へラ切り	*	(14.5)	6.9	3.2	
5	*	*	内面吸	ロクロナギのちナギ消し	*				
6	*	*	要	平行叩き	李昇成				
7	整地層8	*	杯	ロクロナギ、底削回転へラ切り	ロクロナギ	13.2	6.8	4.7	方形勾手・魏刻文 底削回転 底削にヘラキズ
8	*	*	*	*	*	(13.7)	7.0	4.4	外側折筋道「万」か正位
9	*	*	*	*	*	(12.9)	6.0	4.1	外斜削磨器「方」か外底削「方」
10	*	土師器	要	両子叩きのち手附へラケズリ	*				

第7図 セイチ7・8・9層出土遺物

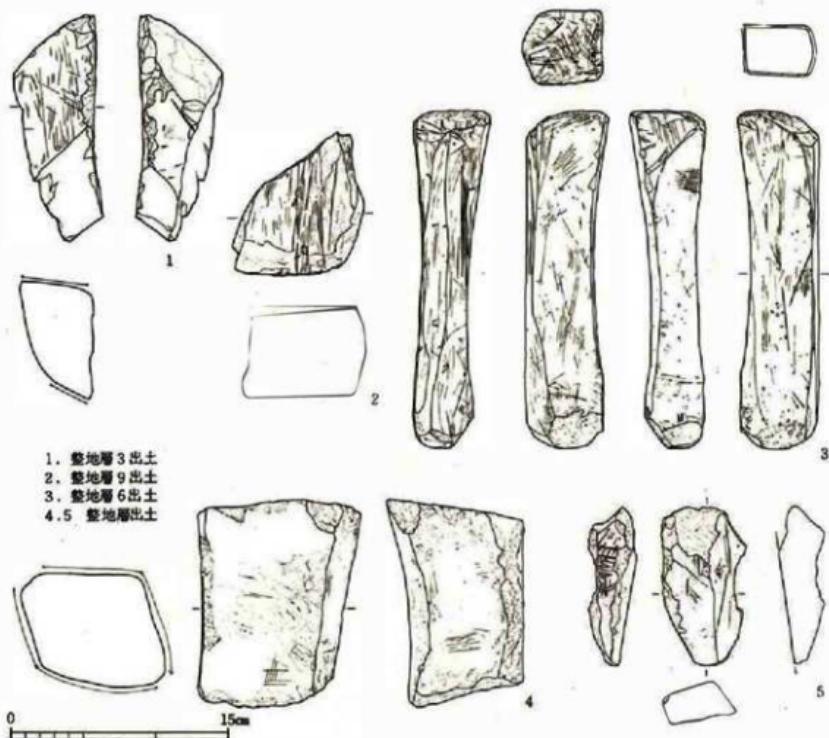


No.	種類	亞種	外 壁 装 置	内 部 装 置	口 径	底 径	高 度	備考
1	油壺	双耳杯	ロクダナギ 耳部下唇へラケズリ。底部凹面有切口	ロクダナギ	11.5 (17.2)	7.0	5.1	
2	-	-	-	*	17.4	7.2	5.3	
3	-	杯	底部凹面へラ切り	*	12.8	7.5	3.1	ほぼ完整
4	-	-	底部凹面へラ切りのちナナデ	*	13.2	6.9	3.2	
5	-	-	底部凹面有切口	*	12.4	6.4	4.0	内底部修理
6	-	-	底部凹面へラ切口	*	14.0	6.4	3.0	
7	-	-	-	*	13.4	7.2	4.4	内底部修理後「方」
8	-	-	-	*	14.0	6.8	3.2	
9	-	-	-	*	14.0	6.2	3.6	
10	土器類	小型杯	底部下唇へ底部周縁斜手持へラケズリ	ハラタガホ, 深色修理	(6.5)	6.2	3.6	
11	-	-	底部下唇へラケズリ	*	14.6	7.4	5.8	
12	-	-	底部凹面切りのち底部下唇へ底部周縁へラケズリ	*	13.6	6.7	4.2	
13	-	甕	斜持へラケズリ	ロクダナギ	9.4			
14	油壺	長颈瓶	-	*	8.0			底部へラ焼きアメ

第8図 セイチ10層出土遺物



第9図 整地層出土



第10図 整地層出土遺物（石）

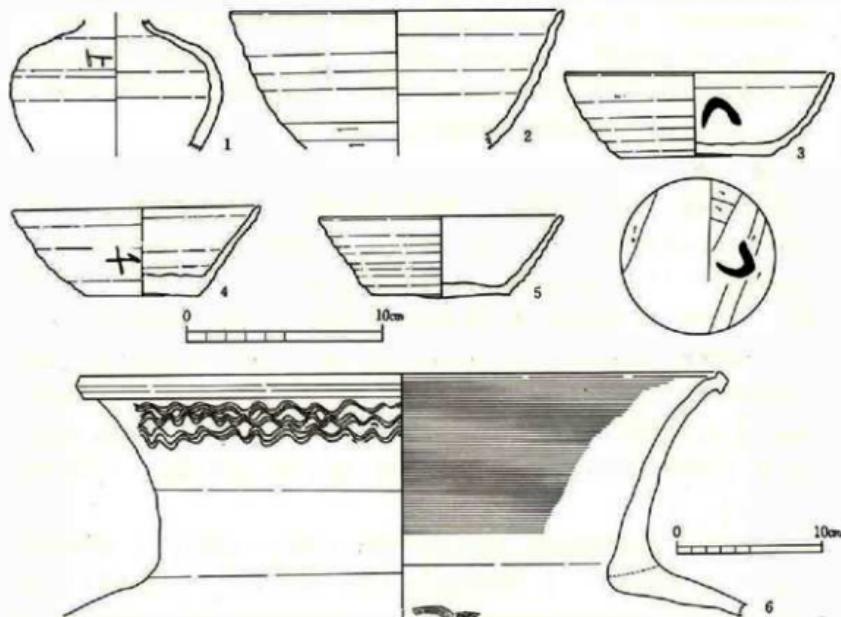
整地層 10 整地層 9 と同範囲に堆積する。黒褐色の粘土質シルトで、層厚は 3~10cm を計り、層中には、焼土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

(2) 標立柱建物跡

SB 237 建物跡 調査区東側の整地層 6 上面で検出した南北 1 間以上、東西 3 間の建物跡で

ある。SB 238・239建物跡と重複関係があり、これらより新しい。建物の方向は東側柱列でみると、北で約4度東に偏している。柱間は、南側柱列で西より1.48m、1.49m、1.47mで総長4.44mである。東側柱列で1.69mを計り、総長については不明である。柱穴は、楕円形を呈するものと、隅丸方形のものとがあり、規模は65×56cmのものや、32×32cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約20cmを計る。掘り方埋土は、黒褐色シルト、灰黄褐色シルトが主体となっている。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

SB 238建物跡 調査区東側の整地層6上面で検出した南北1間以上、東西3間の建物跡である。SB 237建物跡と重複関係があり、これよりも古い。建物の方向は東側柱列でみると、北で約3度東に偏している。柱間は、南側柱列で西より2.12m、2.69m、2.20mで、総長7.01mである。東側柱列では1.98mを計り、総長については不明である。柱穴は、隅丸方形のもの



No.	遺構	種類	形状	外面調査	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	pit 106	須恵器	小型甕	ロクロナデ	ロクロナデ				
2	pit 167	+	杯	ロクロナデ、回転ヘラカズリ	*	17.0			
3	+	+	杯	* 底部回転ヘラ切りのち一括ナデ	*	13.6	7.8	4.3	外面底部・内面 全体磨削「フ」
4	+	+	+	+ 底部回転ヘラ切りのらナデ	*	12.7	5.7	4.4	外面部全体磨削 完成
5	+	+	+	* 底部回転ヘラ切り	*	12.4	7.0	4.1	
6	pit 92	+	甕	ナデ	カキ目、ロクロナデ、音波紋文等で具徴	45.1			

第11図 柱穴出土遺物

と、楕円形を呈するものがあり、規模は一辺47×53cmのものや、40×50cmのものがあり様々である。柱痕跡は約18cmである。掘り方埋土は、黒褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・長頸瓶が出土している。

S B 239建物跡 調査区東側の整地層6上面で東西3間を検出しているが、南北についてはおそらく北側の調査区外に延びる建物跡である。S B 237建物跡、S D 241溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。建物の方向は東で約1度北に偏している。柱間は、南側柱列で西より2.54m、2.35m、2.75mで総長7.64mである。柱穴は、楕円形を呈し、規模は42×49cm前後を計る。柱痕跡は径約18cmである。掘り方埋土は、黄褐色土をブロック状に含む灰黃褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・壺、平瓦が出土している。

S B 240建物跡 調査区中央部の整地層6上面と第VI層上面で検出した東西3間以上、南北1間以上の建物跡である。S D 242溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。建物の方向は東側柱列でみると、北で約4度東に偏している。柱間は、北側柱列で東より1.49m、1.35m、1.68mを計る。東側柱列では1.65mである。柱穴は、楕円形を呈し、規模は37×45cm前後を計る。柱痕跡は径約13cmである。掘り方埋土は、黒褐色シルト、褐灰色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯が出土している。

(3) 溝 跡

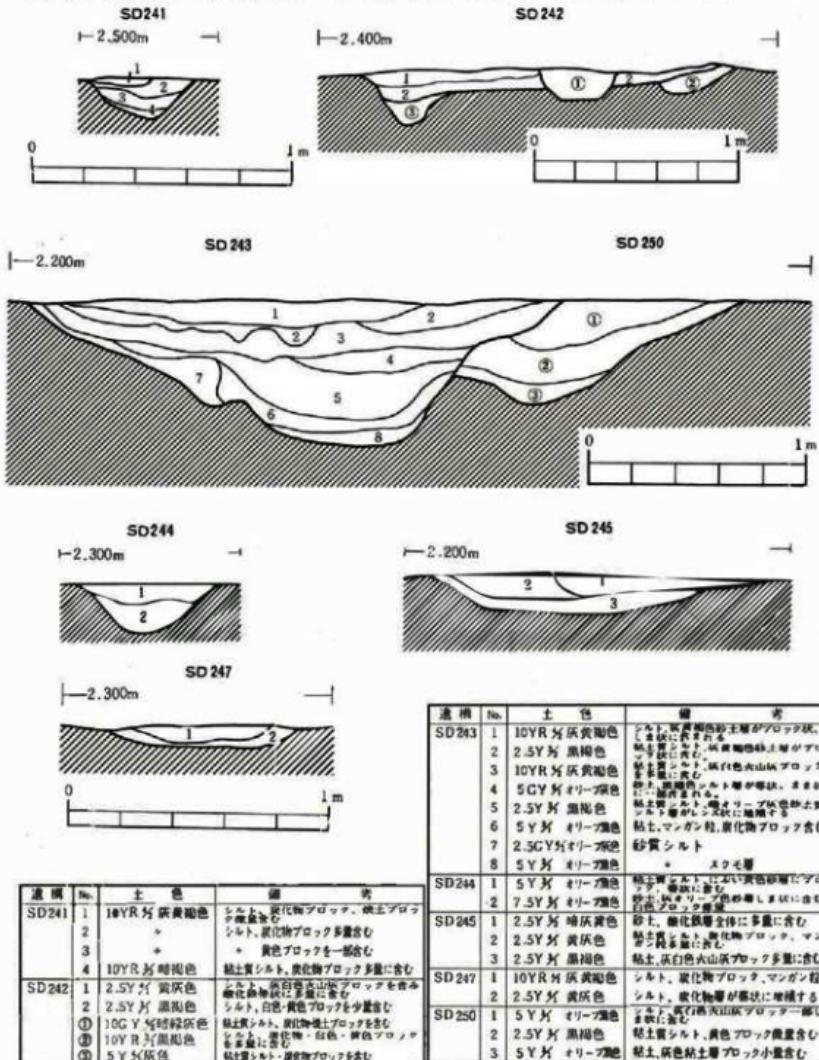
S D 241溝跡 調査区のほぼ中央、整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係からS B 239建物跡よりも古い。長さは約2.20mで、上幅35~65cm、深さ約15cmを計る。埋土は4層に分けられ、灰黃褐色シルトを主体とし、最下層は暗褐色粘土質シルトである。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・壺、丸瓦の他に土製カマドの破片と砥石が出土している。

S D 242溝跡 調査区のほぼ中央、整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係からSB 240建物跡よりも古い。確認できる長さは約4mで、上幅約1.80m、深さ約15cmを計る。埋土は、黄褐色シルトと黒褐色シルトの2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・高台付杯・甕・壺、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

S D 243溝跡 調査区の南西部、第V層上面で検出した東西に走る溝跡である。溝跡の東側において、南へ張り出している。重複関係からSK 256土塙より古く、SD 250溝跡よりも新しい。確認できる長さは約8.5mで、上幅約250cm、深さ約65cmを計る。埋土は、8層に分けられるが、基本的には灰黃褐色シルト、灰色シルト、黒褐色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器、瓦の他に曲物や盤などの木製品が出土している。

S D 244溝跡 調査区南西部のV層上面で検出した南北に走る溝跡である。SK 256土塙と

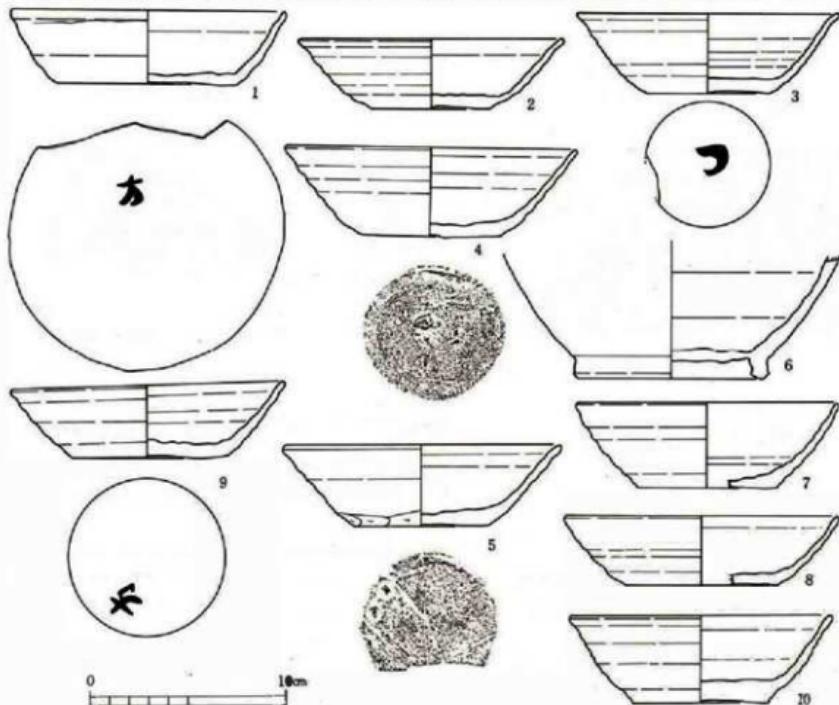
重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは2.7mで、上幅50~75cm、深さ約25cmを計る。埋土は、オリーブ黒色の粘土質シルト層とオリーブ黒色の砂質層の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品が出土している。



第12図 溝跡セクション図

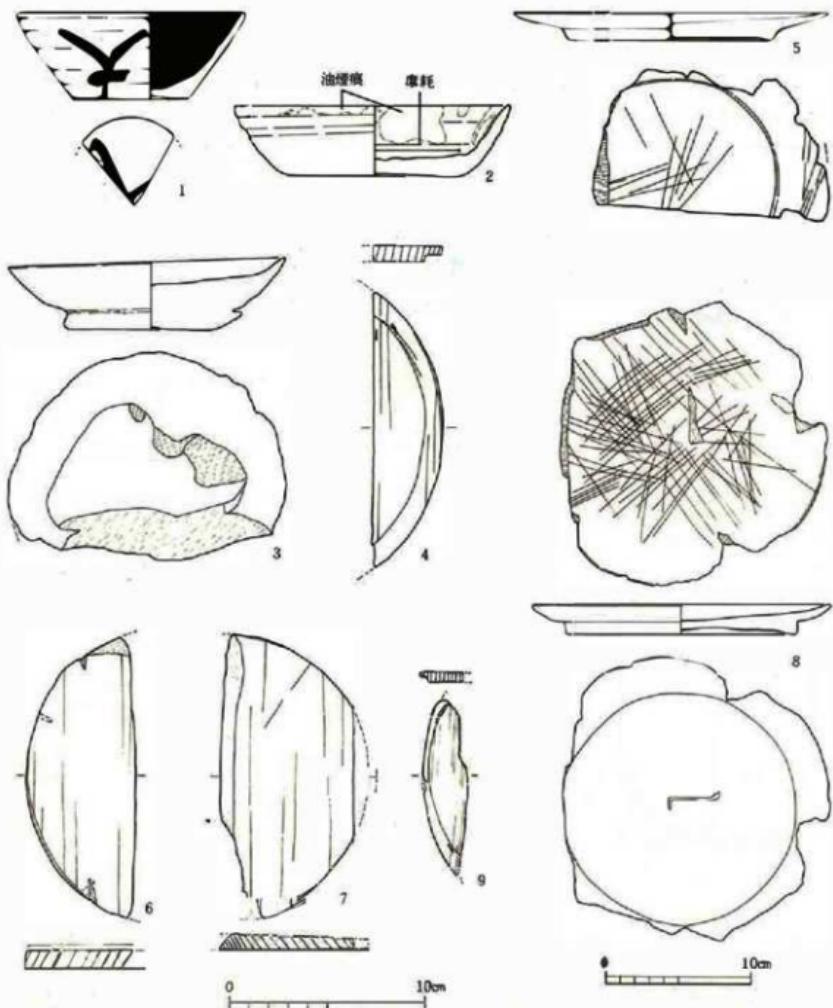
SD 246 溝跡 調査区のほぼ中央部、整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。長さは約1.8mで上幅約1.4m、深さ約25cmを計る。埋土は、上層から暗灰黄色シルト層、黄灰色シルト層、黒褐色粘土質層の3層に分けられ、第1層には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、平瓦・丸瓦が出土地している。

SD 246 溝跡 調査区東側の整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 251 小溝跡群と SK 255 土塁と重複関係があり、これらよりも古い。長さは約6.2mで、上幅35~80cm、深さ約10cmを計る。埋土は、黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕、



No.	通 標	形 性	種類	基 形	外 表 刻 痕			内面調整			口 径	底 径	高 度	保 存
					ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0)	9.2	4.2				
1	SD 251	3層	須恵器	杯	+	+	+	(13.4)	6.0	3.5				
2	*	1層			+	+	+	(13.2)	6.2	4.0				
3	*				+	+	+	(14.7)	7.1	4.4				
4	SD 242	2層			+	+	+	(14.1)	6.8	4.1				
5	*				+	+	+		9.8					
6	*				+	+	+	(13.3)	(7.1)	4.3				
7	*				+	+	+	(13.9)	7.6	3.5				
8	*	3層			+	+	+	14.0	8.0	3.7				
9	*				+	+	+	(13.3)	6.9	4.4				
10	*	4層			+	+	+							

第13図 SD 242・251 出土遺物

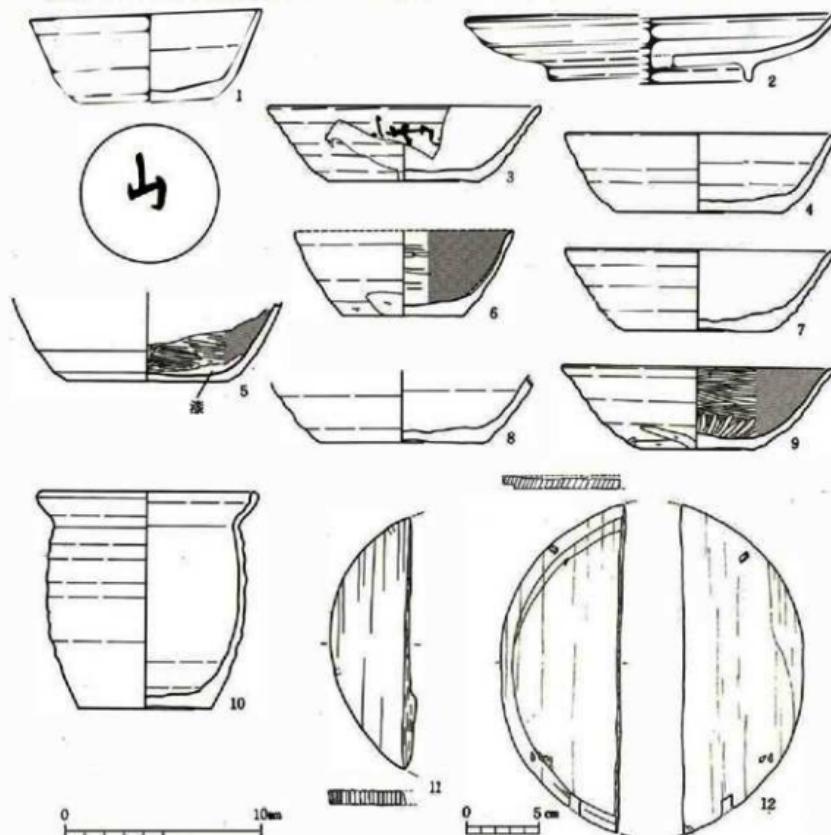


No.	遺物	層位	材質	形	外観測定	内面調査	口径	底径	高さ	備考
1	SD243	1層	須恵器	杯	ロコロナギ 底部開口無切り	ロコロナギ	(11.7)	(6.0)	4.4	算盤格子目(主)
2	+	2層	-	*	*	底無のため切離し不明	-	-	-	完形、油煙痕
3	+	-	水器品	盤か	未調査	外径13.2cm、底径(9.2)cm、高さ2.8cm	-	-	-	-
4	+	3層	-	曲物蓋板	木目材	外径17.7cm、内径(15.7)cm、厚さ0.8cm、周縁の厚さ0.5cm	-	-	-	-
5	+	-	-	盤	ロコロナギ、外面にキズ多有	外径(15.0)cm、底径(10.4)cm、高さ1.4cm	-	-	-	-
6	-	-	-	曲物底板	木目材	径15.0cm、厚さ1.0cm、内面は漆塗りか、側面に針孔2ヶ所既存	-	-	-	-
7	+	-	-	*	*	*、径14.4cm、厚さ0.8~0.5cm	-	-	-	-
8	+	5層	-	盤	ロコロナギ、内面に焦痕、多数のキズ有	外底部に焼印有、口径(20.7)cm、底径16.0cm、高さ2.0cm	-	-	-	-
9	SD244	1層	曲物蓋板	-	木目材	径16.8cm、厚さ0.5cm、周縁の厚さ0.3cm	-	-	-	-

第14図 SD 243・244出土遺物

赤焼き土器が出土している。

SD 247 溝跡 調査区のほぼ中央部、整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。重複関係から SD 242 溝跡より古く、SD 249 溝跡より新しい。確認できる長さは約 1.4m、上幅約



No.	通 番	層位	種 類	形 式	外 面 図	内 面 図	口 径	底 径	高 度	備 考
1	SD248	1層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのらナデ	ロクロナデ	11.8	7.0	4.6	外表面黒褐色山字
2	+	+	+	盤	*	*	(18.9)	16.4	3.3	外底部に墨痕
3	+	+	环	*	底部回転あ切り	*	(14.0)	7.8	3.8	外全体に墨着候
4	+	+	环	*	底部回転ヘラ切りのらナデ	*	(13.7)	8.3	4.0	内全体に墨着候
5	+	+	土器器	*	体部下端~底部回転ヘラタケツリ	ヘラミガキ-黑色處理	(8.2)			
6	+	+	*	*	*	*	(11.2)	6.2	(4.3)	
7	+	2層	須恵器	*	底部回転ヘラ切りのらナデ	ロクロナデ	(13.6)	7.4	4.1	内全体に墨着候
8	+	+	*	*	底部回転へら切り	*	(8.4)			
9	SD250	土器器	*	*	体部下端~底部手持ヘラタケツリ	ヘラミガキ-黑色處理	13.8	5.6	4.2	丸形
10	+	3層	小 口 壺	*	工具状のナデ、底部回転あ切り	ロクロナデ、ナデ	11.7	6.7	11.1	
11	+	2層	木製品	木物底板	板目材 径(14.4)cm、厚さ 0.7cm、背筋 2ヶ所残存					
12	+	3層	木物底板		- 外径(23.6)cm、内径(21.7)cm、厚さ 0.9cm、同様の厚さ 0.6cm					

第15図 SD 248・250 出土遺物

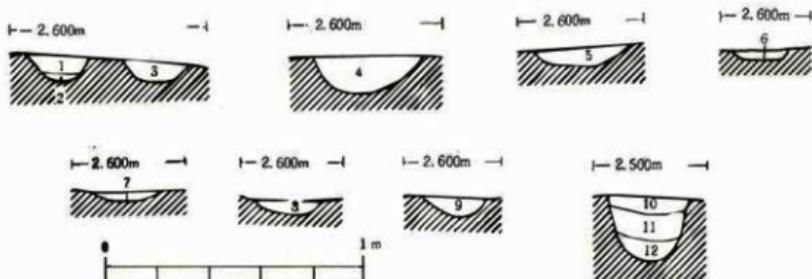
75cm、深さ約8cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルト層、黄灰色シルト層の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・壺・須恵器杯・甕・長頸瓶・小型壺、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品が出土している。

SD 248溝跡 調査区東側の整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。確認できる長さは約4.5m、上幅50~160cm、深さ約25cmを計る。埋土は、5層に分けられるが、基本的には黒褐色シルトと黄灰色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・壺・須恵器杯・高台付杯・甕・長頸瓶・赤焼き土器・丸瓦が出土している。

SD 249溝跡 調査区の中央部、整地層6上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 247溝跡と重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは約2mで、上幅約25cm、深さ約5cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルト層の単層である。遺物は、土師器壺・須恵器杯・甕・長頸瓶・赤焼き土器・丸瓦が出土している。

SD 250溝跡 調査区南西部の第12層上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 243溝跡とSK 256土塙と重複関係があり、これらよりも古い。SD 243溝跡とほぼ同じ位置で重複しており、大半が壊されている。確認できる長さは約7.8m、深さ約50cmを計る。埋土は、オリーブ黒色シルト層、黒褐色粘土質シルト層、オリーブ黒色粘土質層の3層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・長頸瓶・平瓦・丸瓦の他に曲物の底板・蓋板などの木製品が出土している。

SD 251小溝跡群 調査区東側の整地層6上面及び整地層7上面で検出した南北に走る小溝跡である。重複関係からSK 252土塙よりも古く、SD 246溝跡より新しい。規模は、上幅が



遺構	No.	土色	固有者	遺構	No.	色	固有者
SD251	1	10YR 5/4灰黄褐色	シルト、炭化物ブロック多量に含む	SD251	7	10YR 5/4灰黄褐色	シルト、炭化物ブロック微量含む
	2	*	*		8	*	シルト炭化物、ブロック微量含む
	3	*	*		9	*	シルト、炭ブロック少量含む
	4	*	*		10	10YR 5/4黑褐色	シルト、炭化物ブロック多量含む
	5	*	*		11	10YR 5/4灰黄褐色	粘土質シルト、磁化鉄等状に含む
	6	*	*		12	10YR 5/4褐灰色	*

第16図 SD251小溝跡群セクション図

20~65cmで、深さ5~25cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルトが主体になっている。遺物は、土師器杯・壺・須恵器杯・稜輪・壺・長頸瓶、丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

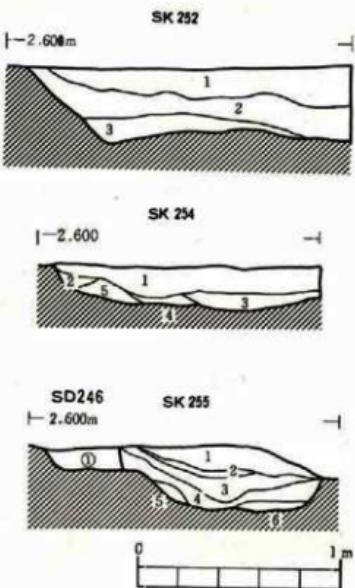
(4) 土 坑

SK 252 土坑 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。SD 251 小溝跡群と重複関係があり、これよりも新しい。平面形は不整形を呈するものと考えられる。規模は、長軸を約3.0mまで確認し、短軸は約1.9mである。深さは約35cmを計る。埋土は、3層に分けられ、灰黄褐色を基調とし、上層が粘土質で、最下層は砂質シルトである。遺物は、土師器杯・壺・須恵器杯・壺・壺・赤焼き土器杯・高台付杯・平瓦・丸瓦の他にキセルが出土している。

SK 253 土坑 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。SK 254 土坑と重複関係があり、これよりも新しい。平面形は不整円形を呈するものと考えられる。規模は、長軸が約1.0mで、短軸は約0.5mまで確認した。深さは約25cmを計る。遺物は、土師器壺・須恵器杯・壺が出土している。

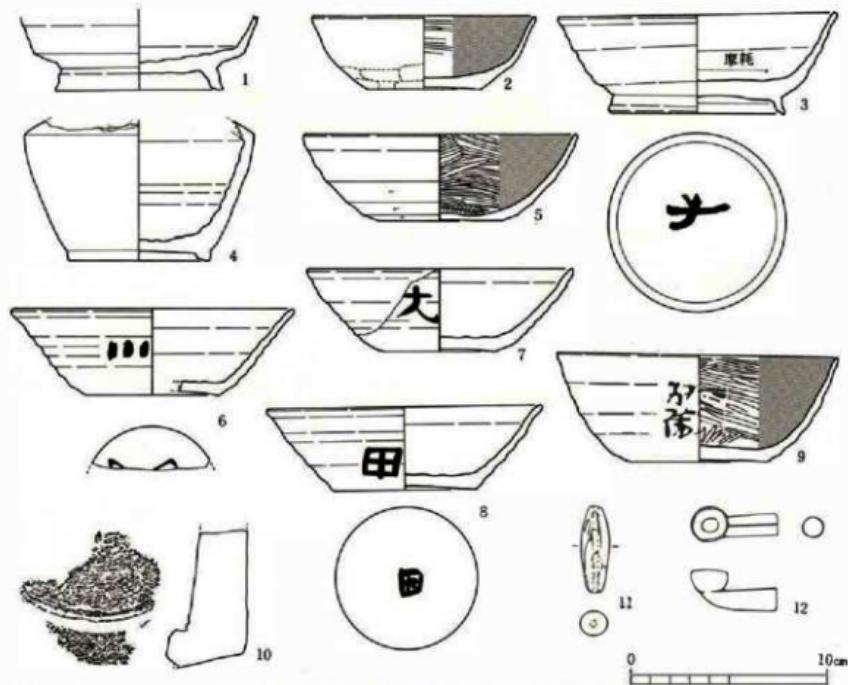
SK 254 土坑 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。重複関係からSK 255 土坑より新しく、SK 253 土坑よりも古い。平面形は不整形を呈するものと考えられる。規模は、長軸が約1.8mで、短軸は約1.3mまで確認した。深さは約20cmを計る。埋土は、5層に分けられるが、基本的には灰黄褐色シルト層と褐灰色シルト層である。遺物は、土師器杯・壺・須恵器杯・稜輪・壺・長頸瓶、赤焼き土器・丸瓦が出土している。

SK 255 土坑 調査区東側の整地層6上面で検出した。重複関係からSK 254 土坑よりも古くSD 246 溝跡よりも新しい。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は長



直 横	No.	土 色	備 考
SK 252	1	10YR 4/2 灰黄褐色	粘土、酸化鉄ブロック状に多く含む
	2	*	*
	3	10YR 4/2 *	砂質シルト、灰黄褐色粘土と互層
SK 254	1	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト、マグン粒混在、酸化物ブロック含む
	2	7.5YR 4/2 褐灰色	シルト、酸化物ブロック含む
	3	10YR 4/2 褐灰色	*
	4	*	炭化物ブロック含む
	5	10YR 4/2 (に) 深褐色	粘土、5mm以下の炭化物ブロックを含む シルト、酸化鉄ブロック多量に含む
SK 255	1	10YR 4/2 褐灰色	シルト、酸化鉄ブロック多量に含む
	2	10YR 4/2 黒褐色	粘土、黒色粘土層を帯状に含む
	3	10YR 4/2 褐灰色	*
	4	*	炭化物ブロック、マグン粒混在含む
	5	*	粘土質シルト、灰黄褐色砂層しま状に含む
	6	10YR 4/2 灰黄褐色	*
①		10YR 4/2 褐黄色	オリーブ灰褐色、粘土に一部含む シルト、黄褐色土を帯状に含む

第17図 SK 252・254・255土坑、SD 246溝跡セクション図

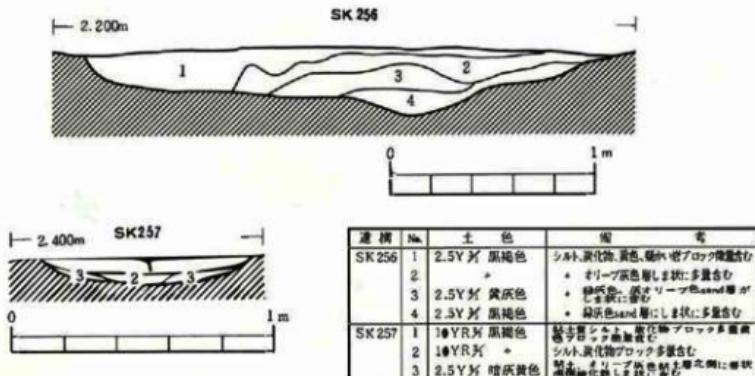


No.	層	層位	種類	形	外 面 圖	内 面 圖	口径	底径	高さ	備考
1	SK254	1層	須恵器	杯	横	クロナゲ	(8.6)			
2	SK257	*	土師器	杯	*	体部下端手持ヘラケズリ、底部不規 ヘラミガキ・黒色処理	11.4)	5.8	3.7	
3	*	須恵器	高台付杯	*	底部回転半切り	クロナゲ・底部摩耗	14.2	9.0	5.0	
4	SK256	*	土師器	瓦	*	クロナゲ	7.3			
5	*	2層	土師器	杯	体部下端～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.9)	6.3	4.4	
6	*	*	須恵器	*	*	クロナゲ	(14.4)	(6.8)	4.4	外底部墨書き「口」
7	*	*	*	*	*	*	(13.5)	5.7	4.2	注口をもつ
8	*	3層	土師器	*	*	*	(14.1)	7.2	4.2	外底部墨書き「大」
9	*	*	土師器	*	*	ヘラミガキ・黒色処理	14.3	7.0	5.4	外底部墨書き「田」
10	*	*	瓦	*						外側部墨書き「口」
11	*	*	土 器		重複文 大きさ 4.4cm、幅 1.4cm					
12	SK252	1層	陶製品	キセル	原形部					

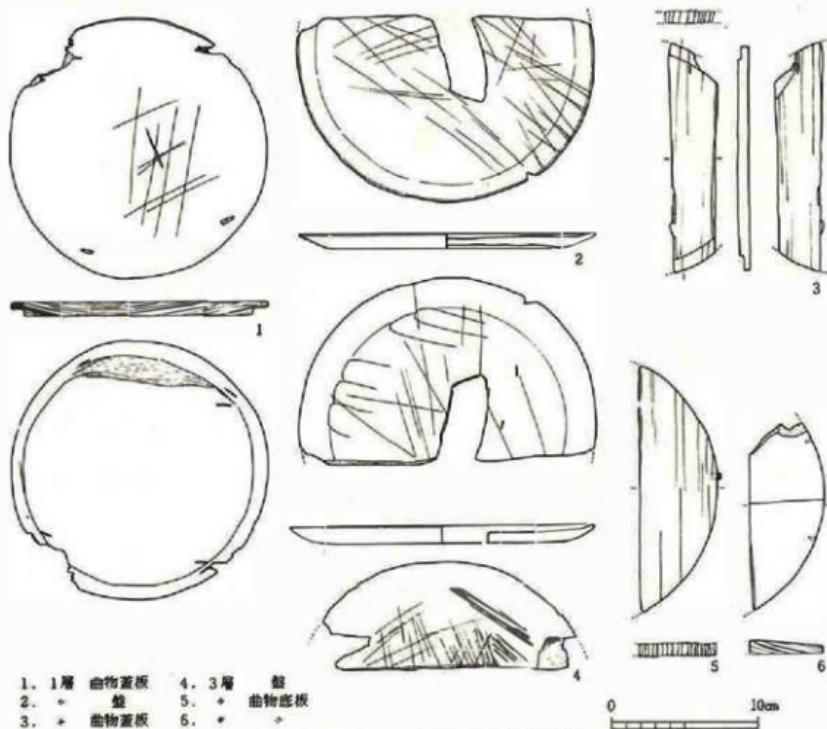
第18図 SK 出土遺物

軸約1.4m、短軸約1.2m、深さ約25cmを計る。埋土は6層に細分されるが、基本的には褐色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・壺、須恵器杯・壺・蓋、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

S K 256 土塙 調査区南西部の第Ⅱ層上面で検出した。SD 243・250 溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。平面形は不整方形を呈する。規模は長軸約5.2m、短軸約2.9m、深さ約30cmを計る。埋土は4層に分けられるが、基本的には黒褐色シルト・黄灰色シルトである。遺



第19図 SK256・257 土壌セクション図



第20図 SK 256 土壌出土遺物（木製品）

物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・長頸瓶・壺、赤焼き土器杯・高台付皿、平瓦・丸瓦の他に木製品（盤・曲物）や土製カマドの破片が出土している。

S K 257 土塙 調査区東側の地山面で検出した。平面形は不整形を呈する。規模は長軸が約1.7m、短軸約0.9m、深さ約10cmを計る。埋土は3層に分けられ、基本的に黒褐色と暗灰黄色である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、赤焼き土器が出土している。

〈堆積層出土遺物〉

I～VI層からは、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、土製品、木製品、鐵製品、砥石等が出土している。

I層（表土）には、近世以降の陶器の他に土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦等がある。

II～VI層には、土師器杯・高台付杯・耳皿・甕、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・蓋・甕・壺・長頸瓶、赤焼き土師器杯、灰釉陶器、綠釉陶器等があり、このうち、特にVI層からの出土量が多い。なお、各層ごとの特徴的な違いは見い出せなかった。

土師器杯は、全てロクロを使用しており、内面はヘラミガキ、黒色処理を施しており、製作技法からの違いがみられない。ロクロからの切り離し・調整技法をみると、回転糸切り無調整のものが多く認められ、他に静止糸切り無調整のもの、回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ調整を施しているものがある。

須恵器杯については、ロクロからの切り離し・調整技法から5種類に分類できる。このうちA類の出土量が最も多く、ついでB類であり、両者が杯全体の主流を占める。

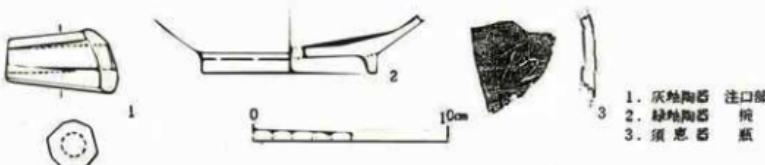
A類：回転糸切りでロクロから切り離し、無調整のもの。

B類：回転ヘラ切りでロクロから切り離し、無調整のもの。

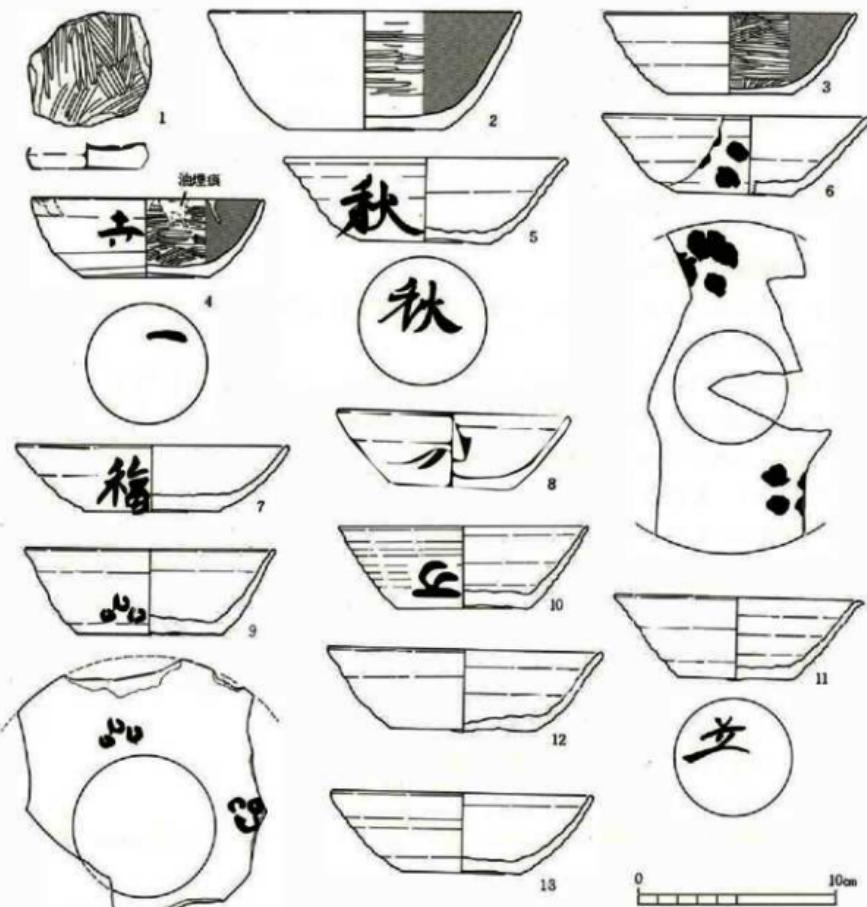
C類：回転ヘラケズリ調整を底部全面から体部下端にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの。

D類：手持ちヘラケズリ調整を底部全面から体部下端にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの。

E類：回転ヘラ切りでロクロから切り離した後にナゲ調整を施しているもの。



第21図 VI層出土遺物

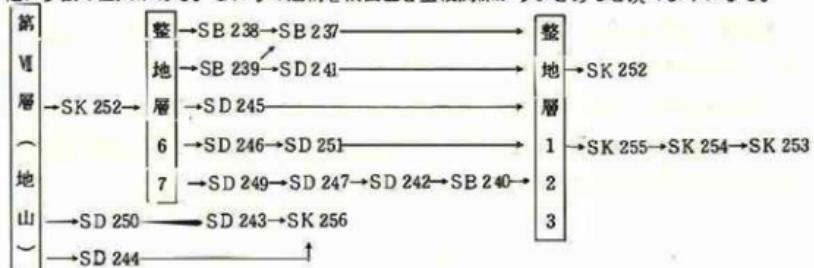


No.	層位	種類	器形	外 面 圖 案	内 面 圖 案	口径	底径	高さ	備考
1	V層	土師器	耳皿	ロクロナデ 底部旋毛切りの周縁手持ヘラケズリ	ヘラミガキ ヘラミガキ・黑色処理	5.6	7.9	6.0	
2	VI層	*	杯	*	*	(15.9)	6.4	4.1	
3	*	*	*	底部回転未切り	*	(12.8)	6.4	4.1	
4	*	*	*	全体下端～底部回転ヘラケズリ	*	11.8	6.2	4.0	黒書「先」「一」
5	*	陶器器	杯	底部回転未切り	ロクロナデ	14.4	6.6	4.5	外体底部墨書き「秋」
6	*	*	*	*	*	13.6	5.8	4.1	墨書き文様
7	*	*	*	底部回転ヘラ切り	*	13.8	7.0	3.4	外体墨書き「福」
8	*	*	*	底部手持ヘラケズリ	*	(11.9)	6.0	3.8	手縫跡墨書き「口」
9	*	*	*	底部回転ヘラ切り	*	(12.7)	7.2	4.3	墨書き文様
10	*	*	*	*	*	12.6	6.8	4.2	外体墨書き「万」
11	*	*	*	*	*	(12.6)	6.0	4.1	外底部墨書き「並」
12	*	*	*	*	*	14.0	7.3	4.1	
13	*	*	*	底部回転未切り	*	13.3	6.0	4.1	

第22図 V層・VI層出土遺物

IV まとめ

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡29条、土塙6基、水田跡、整地層の他に多数の柱穴がある。これらの遺構を検出面と重複関係からまとめるところとなる。



各遺構は、このように整地層を介在して複雑に重複している。ここでは各遺構群の年代を中心について述べることにする。

はじめに、整地層6・7上面検出遺構を覆っている整地層1～3の年代について検討し、これより下層で検出した遺構の下限年代を与えておきたい。整地層1～3より出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。土師器杯は、ロクロ使用のもので表杉ノ入式の範疇に属するもので、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分である。須恵器杯においては、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが主流を占めている。赤焼き土器は、多賀城跡出土土器のうちF群土器の須恵系土器に対比できるもので、F群土器に10世紀中頃の年代が与えられている（註11・12）。したがって、整地層1～3の年代は、おおむね10世紀中頃としておきたい。

整地層6・7上面で検出した遺構群より出土した遺物から検討してみると、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器が出土しており、土師器杯は、ロクロ使用のものでロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが主流である。須恵器杯においては、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが大部分を占めている。次に10世紀前半に降灰したと考えられている灰白色火山灰が、SD 245溝跡付近に自然堆積していることや、SD 245溝跡の層中にブロック状に含まれる。したがって、整地層6・7上面で検出した遺構の年代は、10世紀前半と考へておきたい。

第VII層上面で検出したSK 257土より出土した遺物をみると、土師器、須恵器、赤焼き土器があり、土師器杯は、整地層6・7上面で検出した遺構群から出土するものと同じロクロ使用のものであることや、赤焼き土器が出土していることより、おおむね10世紀初頭と考えておき

たい。

南西部の第2層上面で検出した遺構群については、出土遺物から検討すると、土師器、須恵器、赤焼き土器があり、土師器杯はクロロ使用のもので、切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。また、灰白色火山灰がS D 243溝跡の層中にブロック状に含まれていることより10世紀前半には機能していたと考えられる。

整地層1上面で検出した遺構群については、古代の土器類の他にキセルが出土していることより、近世以降のものと考えられる。

今回の調査では、10層に細分される整地層が検出されたが、これは、本調査区が低丘陵の裾部から低湿地に移行する箇所にあたることや、地山面に起伏があることから、整地事業を行い居住地域を広げたものと考えられる。

(註)

- 註 1. 宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」多賀城跡調査研究所次報1973(1974)
- 註 2. 宮城県教育委員会「市川橋、山王通跡」「宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)」
宮城県文化財調査報告書第57集(1979)
- 註 3. * 「水入通跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集(1982)
- 註 4. 宮城県多賀城跡調査研究所「第37次発掘調査」多賀城跡調査研究所年報1980(1981)
- 註 5. 多賀城市教育委員会「高崎・市川橋通跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第3集(1982)
- 註 6. * 「市川橋通跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第4集(1983)
- 註 7. * 「市川橋通跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第5集(1984)
- 註 8. 註7と同じ
- 註 9. 多賀城市教育委員会「市川橋通跡—昭和59年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第8集(1985)
- 註10. * 「市川橋通跡—昭和61年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第13集(1987)
- 註11. 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要Ⅱ」宮城県多賀城跡調査研究所(1981)
- 註12. 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政序跡本文編」(1982)

(引用・参考文献)

1. 多賀城市教育委員会「難波通跡—昭和54年度発掘調査報告—」多賀城市文化財調査報告書第1集(1980)
2. 田中則和他「山口通跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集(1984)
3. 吉岡泰平他「高速鉄道関係通跡調査概報V」仙台市文化財調査報告書第89集(1986)
4. 八賀晋「古代における水田開発—その土壤的環境—」「日本史研究96」(1968)

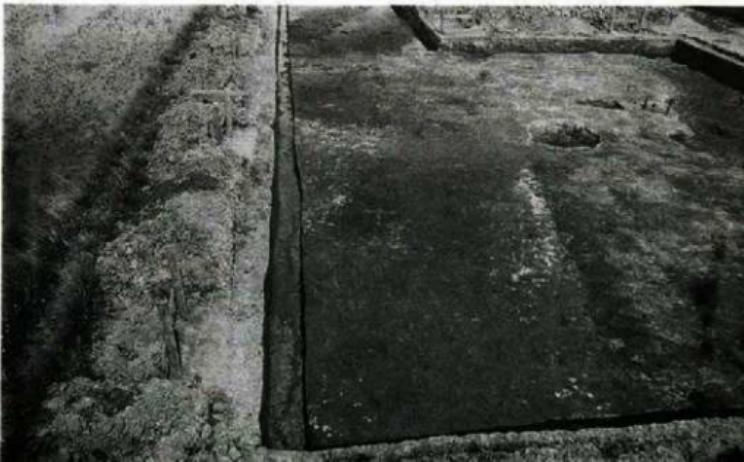
図版 1
遺構全景
(東から)



図版 2
遺構全景
(西から)



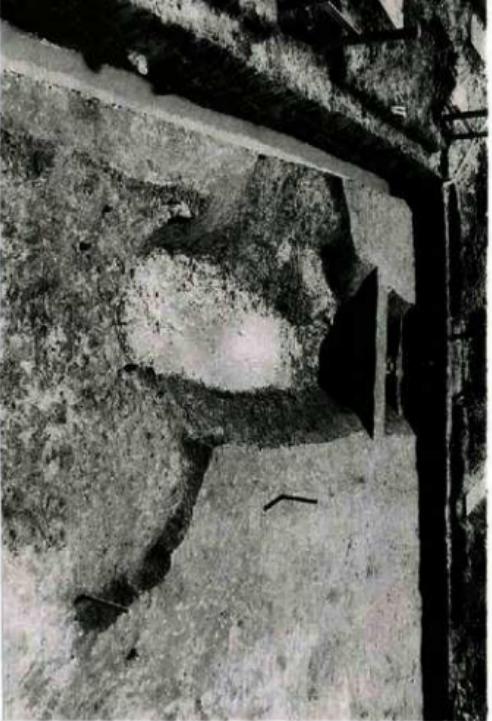
図版 3
水田跡検出状況
(西から)



図版 4
SK 256 土城
(東から)



図版 5
SD 243 溝跡
(東から)



図版 6
SD 250 溝跡
(東から)



図版 7

地山上面全景

(東から)



図版 8

SK 257 土坡

(西から)



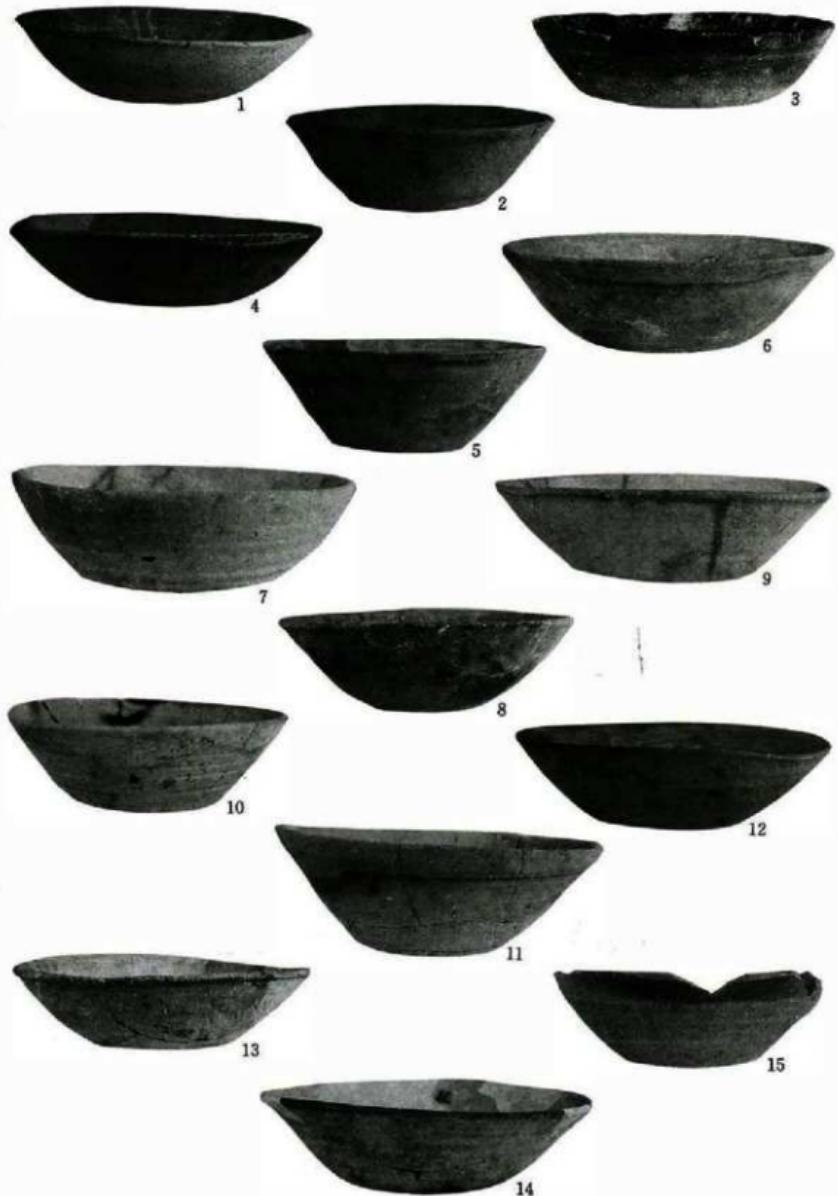
図版 9

整地層10遺物

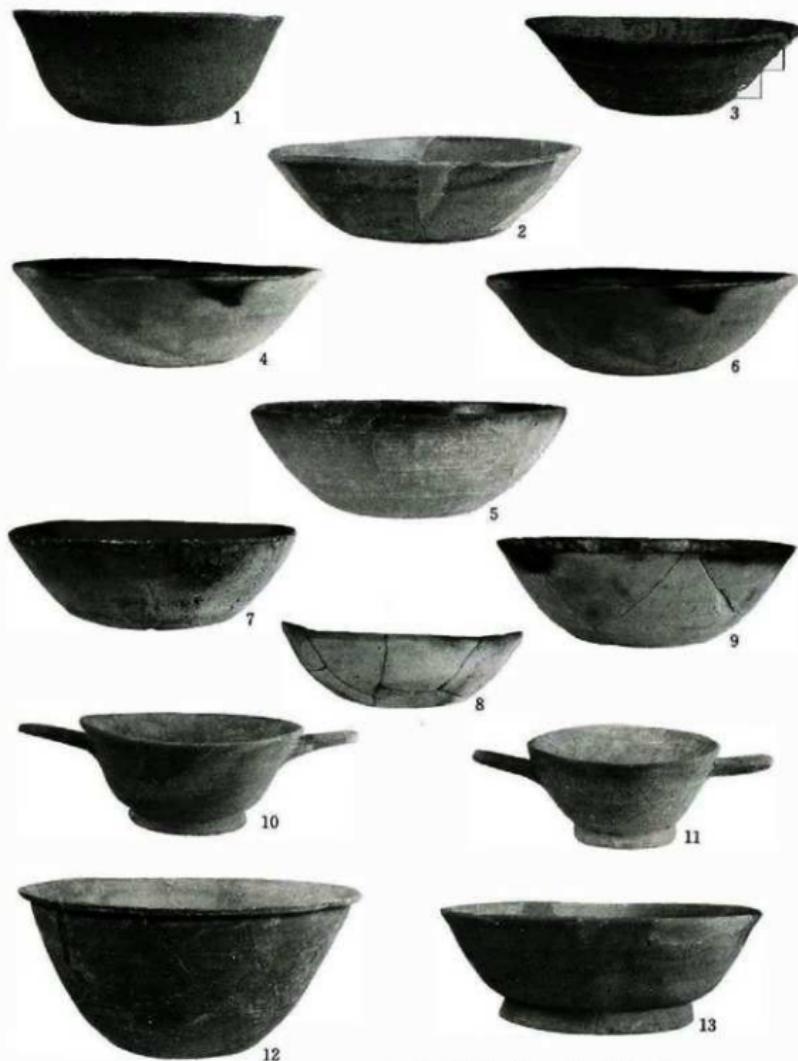
出土状況

(北から)





图版10 出土遗物（须惠器杯）



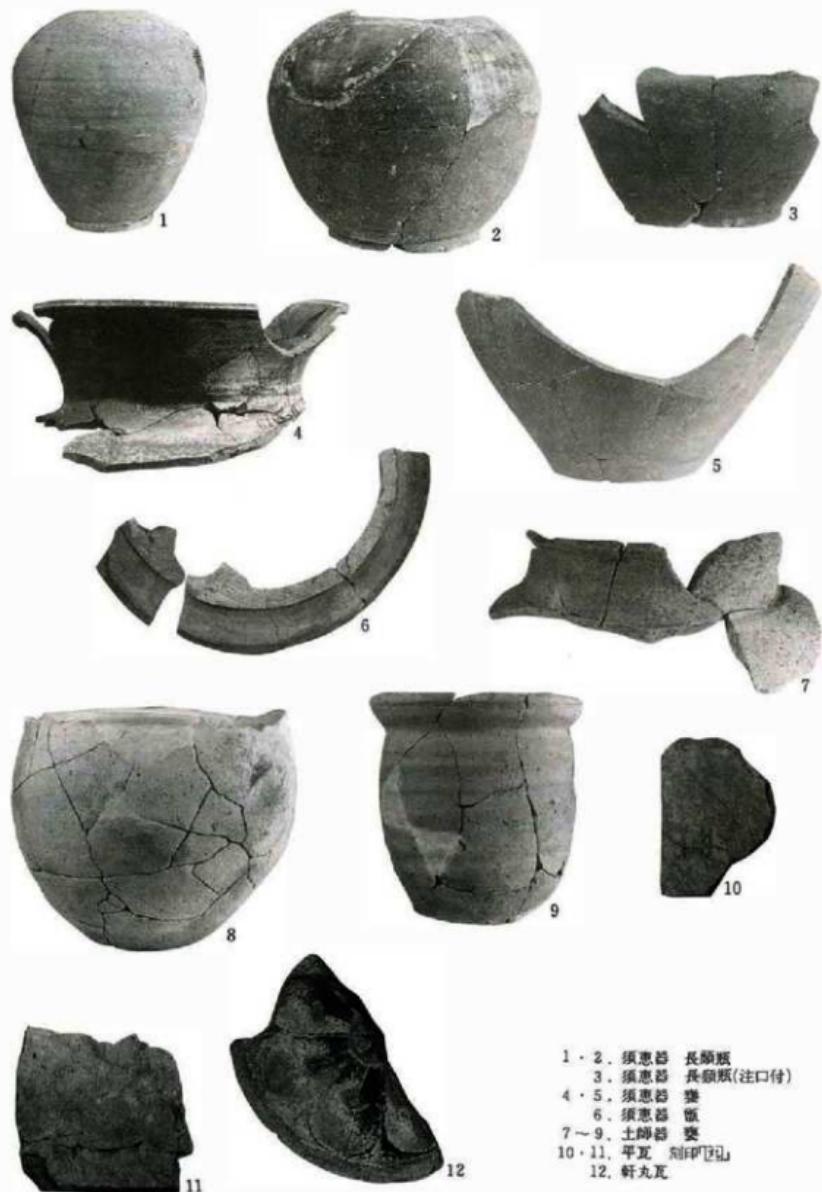
1~3. 須惠器 杯 12. 須惠器 鍤
4~9. 土師器 杯 13. 須惠器 高台付杯
10·11. 須惠器 双耳杯

图版11 出土遗物



1~8. 須惠器 杯
 9·10. 土師器 杯
 11~15. 須惠器 杯
 16. 土師器 杯
 17~23. 須惠器 杯

図版12 出土遺物



圖版13 出土遺物

1 · 2. 穀穗器 長頸瓶
 3. 穀穗器 長頸瓶(注口付)
 4 · 5. 穀穗器 罋
 6. 穀穗器 罋
 7 ~ 9. 土師器 罋
 10 · 11. 平瓦 刻印凹凸
 12. 軒丸瓦



- | | | |
|-------------|-----------------|------------|
| 1. 緑釉陶器 梗 | 5. 平瓦 転用窯 | 12・13. 土 鐘 |
| 2. 灰釉陶器 注口部 | 6. 風字甕 | 14. キセル |
| 3. 灰釉陶器 楠 | 7～9. 土製カマド | 15. 鉄製品 不明 |
| 4. 灰釉陶器 破片 | 10・11. 漆付着土師器 杯 | 16. 鉄製品 钉 |

図版14 出土遺物

市川橋遺跡第9次調査

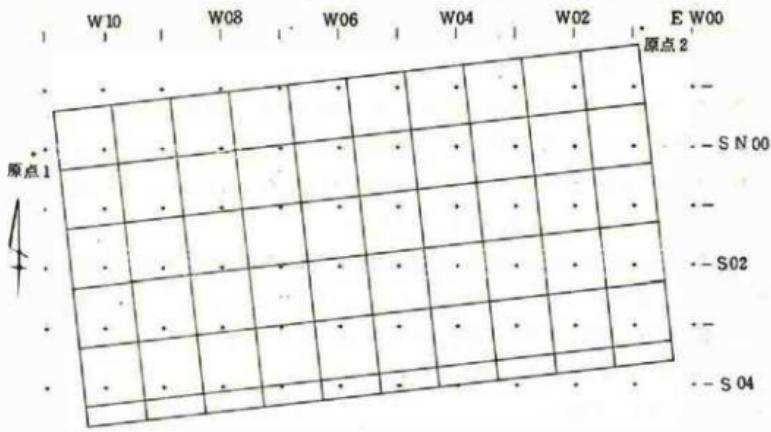
I 調査に至る経緯

本調査については、平成元年3月に地権者から宅地造成工事の計画が提示されたため、その内容等について協議を行った。当該地は、昭和59年度に調査を実施した第5次調査区の北側水田部に隣接し、また、本年度調査を実施した第7次調査区の西側に位置する。その際に多量の遺物を含む整地層や掘立柱建物跡、一本柱列跡、井戸跡・溝跡・水田跡等が発見されており、当該地においても同様な遺構の存在が考えられた(註1)。

このため、地権者に対し調査の協力を依頼し、平成元年9月に発掘調査の承諾書の提出を受け、9月18日から調査を実施した。

II 調査方法と経過

今回の発掘調査は、調査区の南側に隣接する第5次調査において発見された遺構の延びなどを考慮し、また、調査予定地が水田であるため、水田の地形にそって調査区を設定した。調査対象面積は、1020m²でその内の480m²について調査を実施した。



第1図 調査区設定図

調査は、平成元年9月18日より開始したが、調査区が耕作されていたため、水貯き用の排水溝を兼ねた土層観察用のトレンチを設けた。また、重機での表土剥離作業を行うことができないため、手掘りで表土剥離作業を行った。調査区内を一辺3mのグリッドで区画し、南北をアルファベット、東西をアラビア数字で示した。遺物の取り上げにはこれを用いた。表土剥離を10月9日に掘り終え、第Ⅰ層の掘り込みを行う。第Ⅲ層上面及び整地層上面での遺構検出作業を開始するが、遺構は検出できなかった。第Ⅲ層の掘り込みを行い、並行しながら実測図作成のため、原点1(X:-189,169.973, Y:13,966.367)と原点2(X:-189,164.035, Y:13,997.331)を基準とし、遣り方を設定する。10月27日に整地層上面での全景写真撮影を行う。調査区西側の整地層の掘り込みを行い、その際に土層観察用に「十」字にベルトを残した。地山面での遺構検出作業を行い、溝跡・ピット等を検出し、遺構の掘り込み調査を行う。11月30日に調査区西側の全景写真を撮影する。調査区に東側においては、整地層D上面での遺構検出作業を行い、溝跡・柱穴等を検出し、遺構の掘り込み調査を行う。また、調査区の東南部においては、整地層B・Cの掘り込みを行い、地山面で溝跡を検出する。12月19日に調査区東側の全景写真を撮影し、12月25日には、柱穴の断ち割りを行い調査を終了した。

III 調査成果

〈基本層位〉

第Ⅰ層 現在の水田耕作土(表土)で灰色の粘土質からなる。層厚は、10~20cmを計る。

第Ⅱ層 暗灰黄色の粘土層である。層厚は、5~10cmを計り、調査区の南東部に堆積する。酸化鉄・マンガン粒を多量に含む。

第Ⅲ層 黒褐色の粘土層である。層厚は、5~15cmを計る。整地層の窪地に堆積し、特にSD 263・264溝跡の上層に厚く堆積している。層中には、炭化物や焼土をわずかに含む。

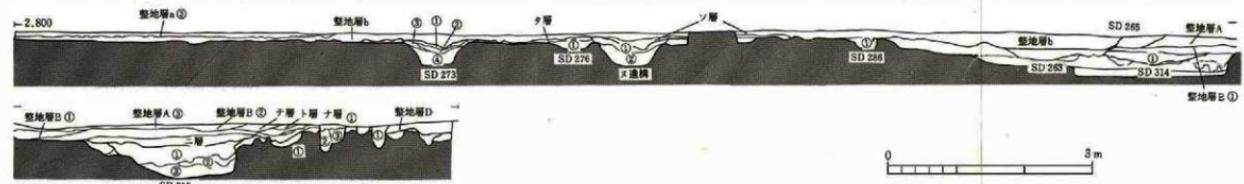
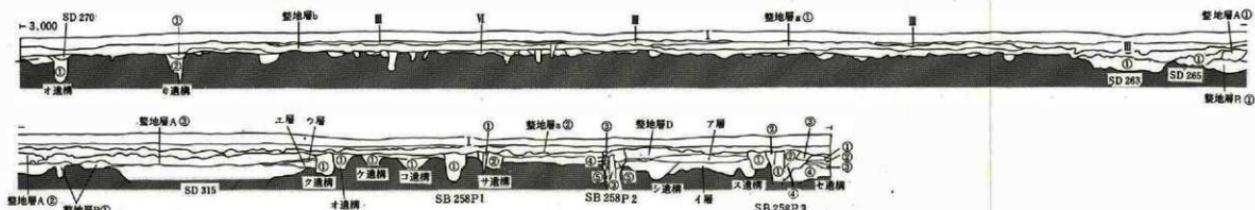
第Ⅳ層 暗灰黄色の粘土層で、調査区の南東部に堆積する。層厚は、5~30cmを計り、下面是起伏がある。層中には、わずかに炭化物を含む。

第Ⅴ層 暗オリーブ灰色の粘土層で、調査区の南東部に堆積する。層厚は、5~20cmを計る。層中には、黒褐色粘土をブロック状に含む。また、下部には地山がブロック状に含まれる。

第VI層 黒褐色の粘土層で、調査区の南西部に堆積する。層厚は、5~30cmを計り、南にゆくに従って厚さを増す。

〈発見遺構と遺物〉

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟、土塁1基、溝跡57条、整地層、多数の柱穴である。



第3圖 主題：東西冷感主義名詞之圖

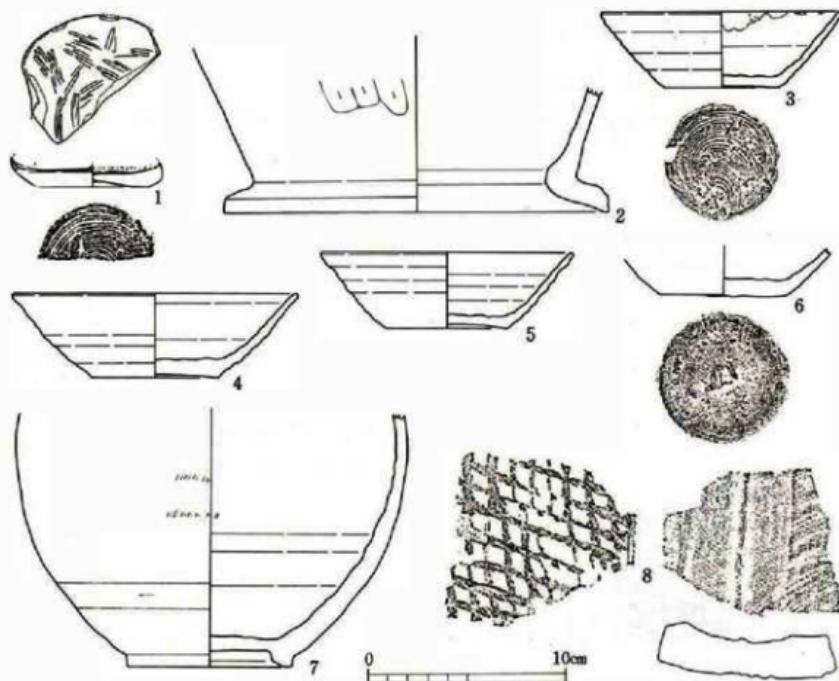
(1) 整地層

整地層は、調査区の全域で検出され、9層に細分化される。

整地層1は、D～F-09・10グリット付近において検出された。暗灰黄色の粘土質シルト層である。層厚は、10~25cmを計る。層中には、マンガン粒・炭化物や焼土を含む。

整地層2は、A～F-06～10グリット付近において検出された。灰黄褐色のシルト層である。層厚は、10~35cmを計る。層中には、炭化物・焼土や黄褐色土を小ブロック状に含み、さらに灰白色火山灰を粒状に含んでいる。

整地層3は、A～F-01～07グリット付近において検出された。灰黄褐色の粘土質シルト層



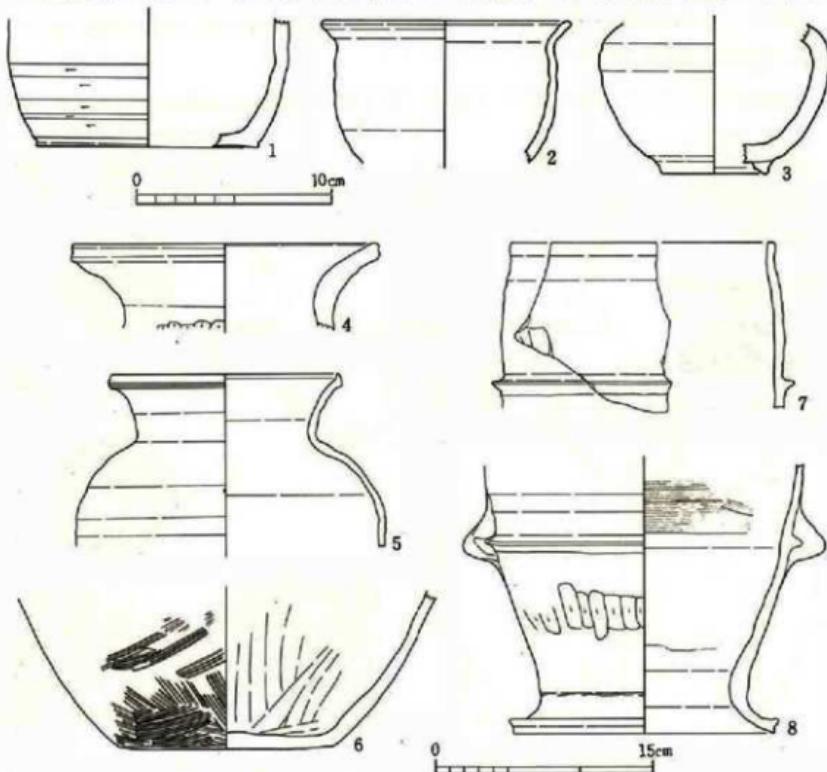
No.	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	土師器	耳皿	ロクロナデ、黒色処理、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(8.8)	(5.6)		
2	+	瓶	*	ロクロナデ			19.4	
3	須恵器	杯	*	手持ヘラケズリ	*		(12.2)	無底
4	+	+	*	底部回転糸切り	*		(10.5)	油煙痕
5	+	+	*	*	*		(12.0)	4.2
6	+	+	*	底部回転ヘラ切り	*		6.0	3.8
7	+	瓶	*	回転ヘラケズリ	*		6.4	
8	平瓦		凹面 布目、糸切り痕	凸面格子叩き	*		6.4	

第3図 整地層2出土遺物

である。層厚は、10~30cmを計る。層中には、マンガン粒・炭化物や焼土を多量に含み、さらに上層には、灰白色火山灰がブロック状に多く含まれる。

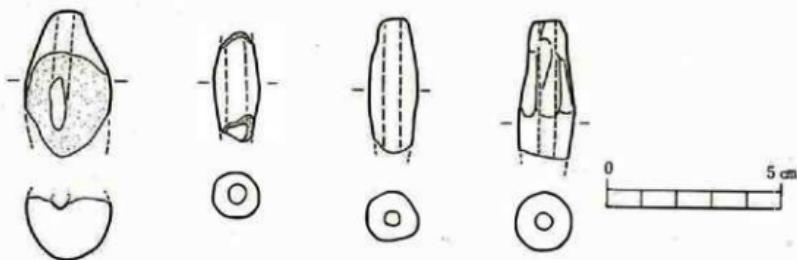
整地層bは、調査区の南西部において検出された。灰黄褐色のシルト層である。層厚は、5~15cmを計る。部分的に黄色土をブロック状に含み、さらに炭化物や焼土を含む。

整地層Aは、A-D-07-08グリット付近において検出された。暗灰黄色の砂質シルト層で



No.	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	灰褐色器	瓶	ロクロナデ、体部下半部縦縫目へラケズリ	ロクロナデ				
2	土師器	甕	+	+				
3	灰褐色器	甕	+	+				
4	+	甕	手持へラケズリ	ナデ	21.4	16.2	(5.5)	
5	+	甕	ロクロナデ	ロクロナデ				口~頸部突起
6	+	甕	平行叩き、体部下端~底部刷毛目	指ナデ				
7	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ、部分的にヘラナデ	(18.2)	(14.8)		把手・鋸付
8	+	+	手持へラケズリ	ヘラナデ、ロクロナデ	(18.1)	(18.1)		+

第4図 整地層a層出土遺物



第5図 整地層a出土（土器）

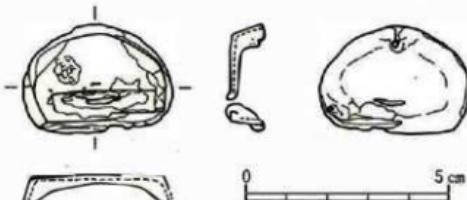
ある。層厚は、10~20cmを計る。層中には、炭化物や焼土を含み、またマンガン粒を多量に含む。

整地層Bは、A~F-07・08グリット付近において検出された。灰黄褐色の粘土質シルト層である。層厚は、5~20cmを計る。層中には、黄色土の粒子を多量に含む。さらに炭化物やマンガン粒を含む。

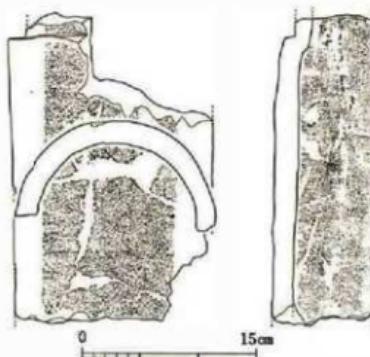
整地層Cは、C~F-06~09グリット付近において検出された。褐灰色の粘土質層である。層厚は、10~20cmを計る。層中には、炭化物や焼土を含む。

整地層Dは、A~D-08~10グリット付近において検出された。黄褐色のシルト質層である。層厚は、15~25cmを計る。層中には、黄色土（地山）をブロック状に多量に含み、さらに炭化物・焼土を含む。

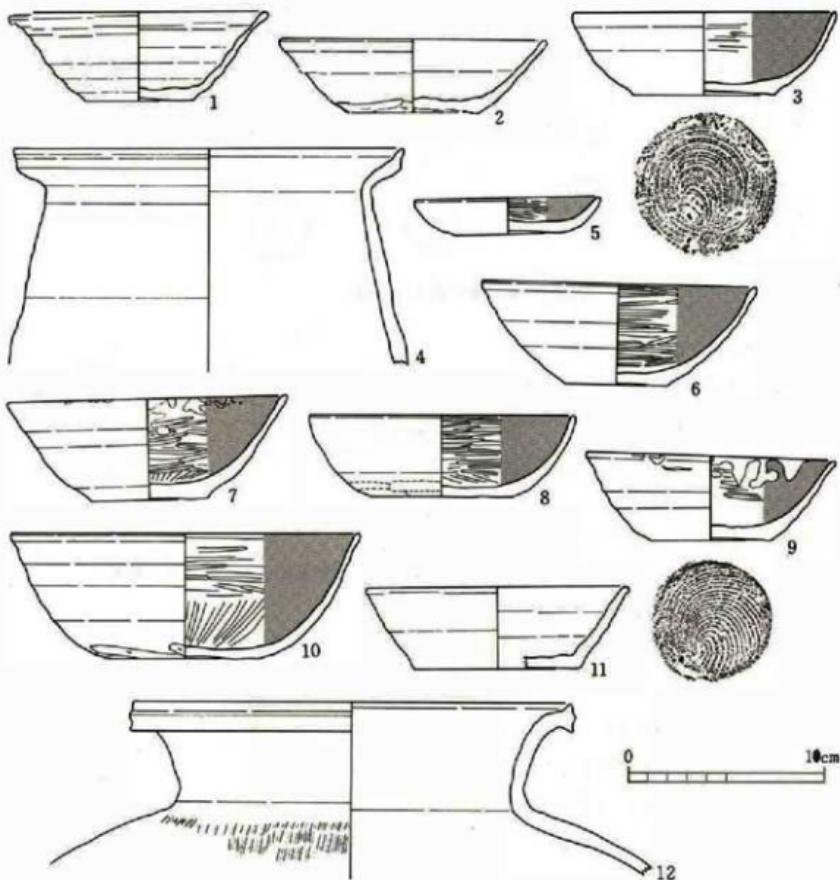
整地層Eは、D~F-08~10グリット付近において検出された。灰黄褐色で上層は砂質シルト、下層は粘土質である。層厚は、10~30cmを計る。層中には、黄色土（地山）をブロック状に含み、さらに炭化物・焼土・酸化鉄を含む。



第6図 整地層b出土金属整品（鉢等）

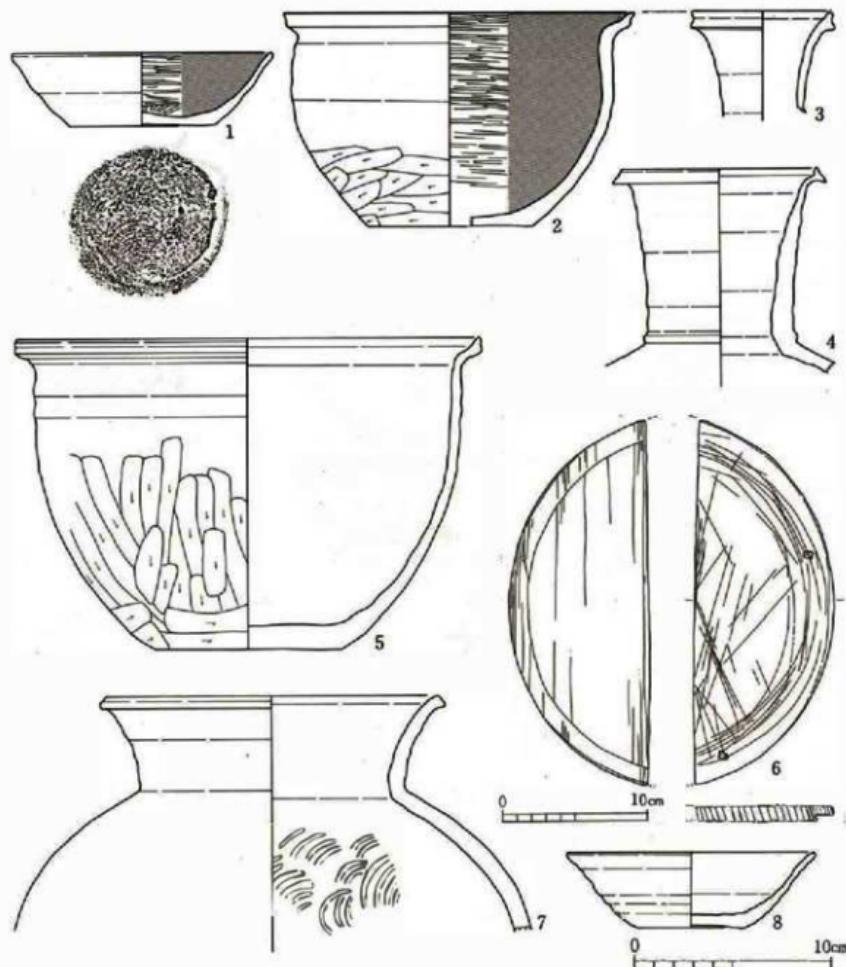


第7図 整地層A出土（丸瓦）



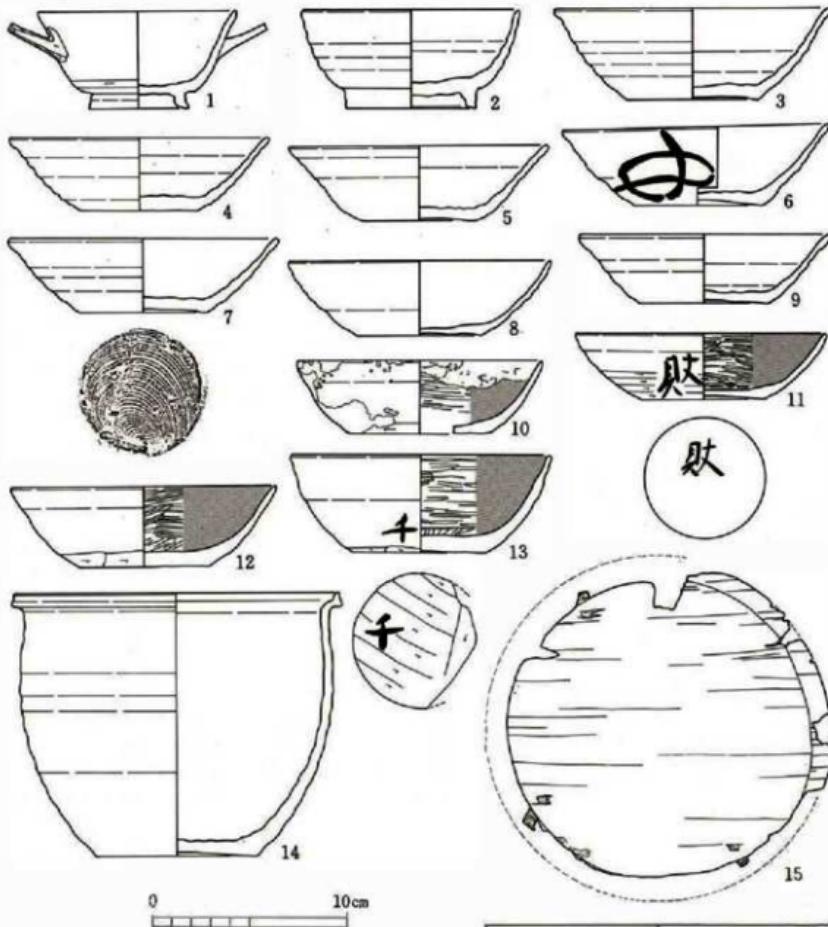
No.	部位	種類	器形	外面 製 織	内面 製 織	口径	底径	器高	備考
1	セイ場A	酒器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(13.2)	5.5	4.5	
2	+	+	杯	+	+	(13.6)	6.6	3.7	
3	+	土器	。	底部下端~底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黑色地理	(13.4)	7.2	4.2	
4	+	+	甕	底部回転糸切り	ロクロナデ	(19.8)			
5	セイ場B	+	小皿	。	ヘラミガキ・黑色地理	(9.5)	(5.4)	1.8	
6	+	+	杯	。	*	(14.0)	(5.2)	5.1	
7	+	+	。	。	*	(14.3)	8.0	5.1	付着物
8	+	+	。	底部下端~底部手持ヘラケズリ	*	(13.5)	7.2	4.1	
9	+	+	。	底部回転糸切り	*	12.7	6.0	4.3	付着物
10	+	+	。	底部回転糸切り+底部下端~底部手持ヘラケズリ	*	(17.8)	(7.8)	6.3	
11	+	酒器	。	底部回転糸切り	*	(13.4)	(8.4)	4.1	
12	+	+	甕	平行印S	ロクロナデ	(22.6)			

第8図 整地層A・B出土遺物



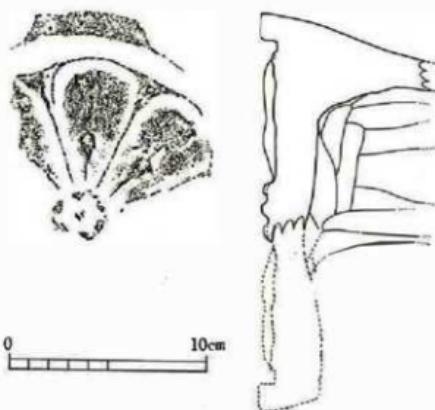
No.	層位	種類	器形	外 面 調 整			内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
				調 整	方 法	備 考					
1	セイタ層C	土器	杯	ロクロナデ、底部回転未切り			ヘラミガキ、黒色処理	(13.4)	7.5	3.7	
2	+	*	盤	ロクロナデ、体部下半～底部手持ヘラケズリ			*	(17.8)	(8.4)	10.8	
3	+	瓶	長颈瓶	ロクロナデ			ロクロナデ	7.4			
4	+	*	*	ロクロナデ			*	(10.8)			
5	+	*	甕	ロクロナデ、手持ヘラクズリ、底鉢ナデ			ロクロナデ、工具状のナデ	(23.8)	9.6	15.7	
6	+	骨製品	曲輪盤	柾目材、径(26.2)cm	厚さ1.0cm	周縁の厚さ0.7cm	外面上にキズ多數				
7	セイタ層D	土器	甕	ロクロナデ			ロクロナデ、青苔痕文まで見事	17.5			
8	+	*	杯	ロクロナデ	底部回転未切り	*		(12.6)	(5.4)	3.8	

第9図 穂積層C・D出土遺物

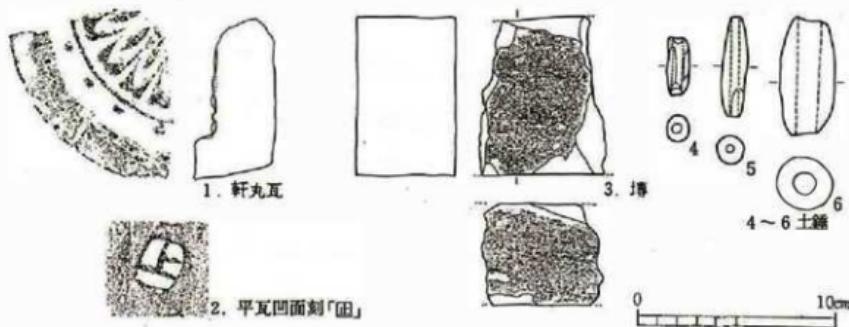


No.	種別	形態	外観調査		内観調査		口幅	縁幅	底径	高さ	備考
			直徑	深さ	直徑	深さ					
1	直腹型	双耳杯	ロクロナフ、底部ヘラケズリ、耳部手捺ヘラケズリ		ロクロナフ		(10.2)	5.1	9.0		
2	*		ロクロナフ		*		(11.2)	6.6	9.0		
3	+	井井	底部凹部斜切り		*		(14.1)	6.6	4.6		
4	-	*	*	*	*		(13.3)	6.0	3.7		
5	-	*	*	*	*		(13.3)	5.9	3.6		
6	-	*	*	*	*		(13.5)	6.4	2.8		
7	-	*	*	*	*		(13.9)	6.4	3.5	外体部裏面「口」	
8	+	*	*	*	*		(13.4)	(6.4)	3.8		
9	*	*	底部斜面ヘラ切り		*		(12.8)	6.6	3.5	内底部に指付痕	
10	土師器	*	ロクロナフ、底部下端～底部回転ヘラケズリ		ヘラミガキ・周邊処理		(12.6)	(7.4)	3.7	外体底部に墨書き「時」	
11	-	-	*	洋部下端～底部	*		(12.8)	6.2	2.4		
12	-	-	*	19部下端～底部手捺ヘラケズリ	*		(13.6)	6.6	4.1		
13	-	*	*	*	*		(13.4)	6.9	5.0	外体底部に墨書き「千」	
14	*	鉢	ロクロナフ、底部斜面斜切り		ロクロナフ		(16.7)	8.3	13.4		
15	不規則 曲面質地	井井	井井	井井	井井	井井	17.6cm	内径(15.6)cm	2.3cm	0.5cm	底盤の厚さ0.3cm

第14図 整地層E 出土遺物



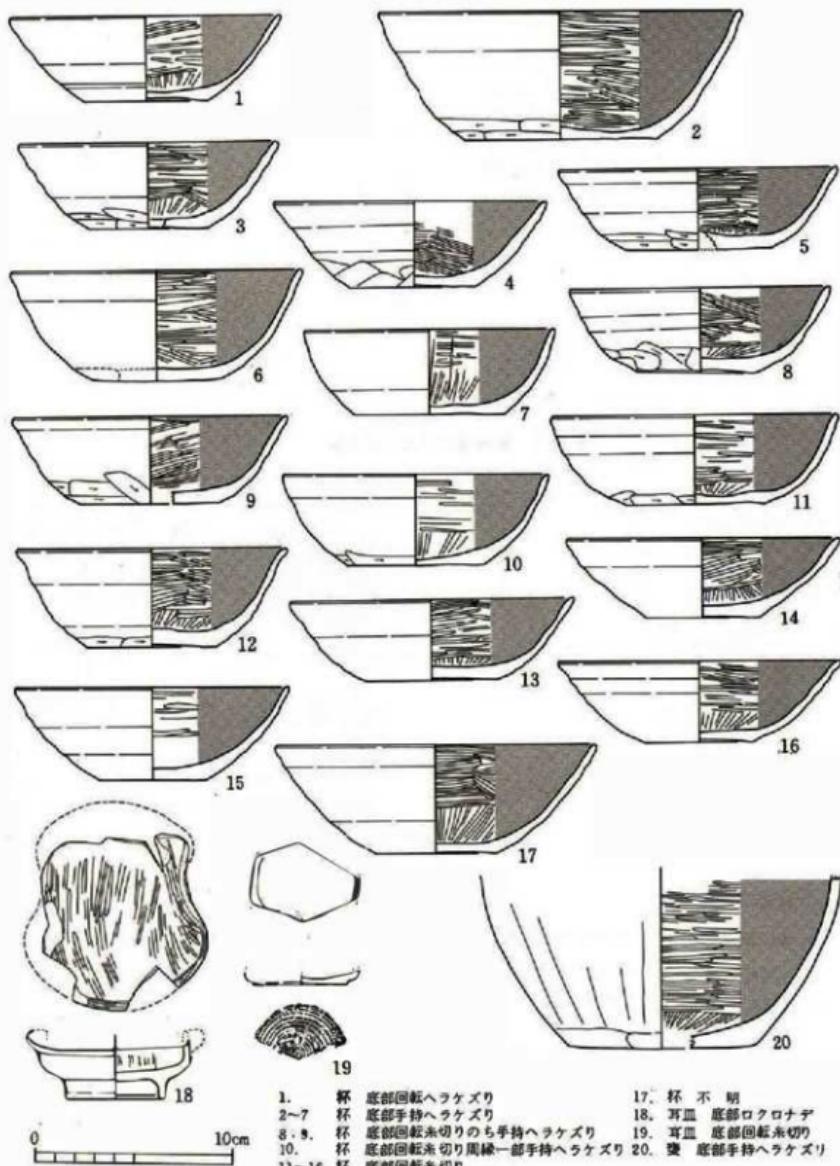
第11図 整地層E出土 軒丸瓦



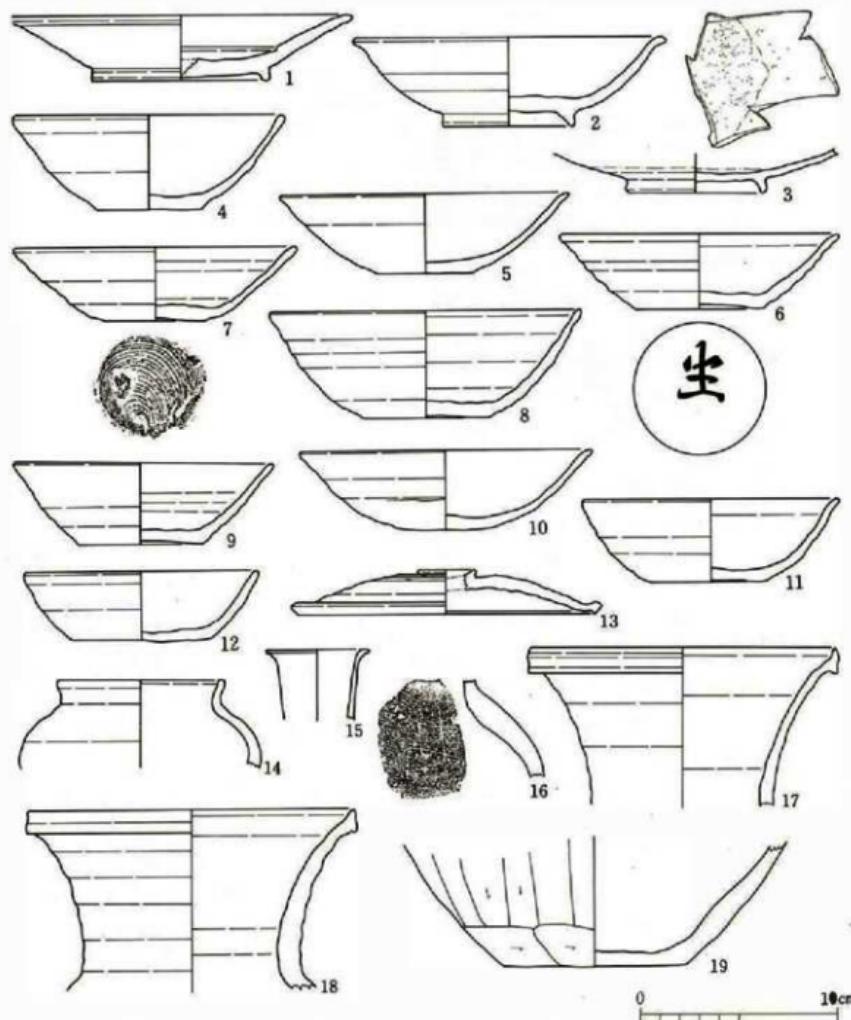
第12図 整地層出土

(2) 挖立柱建物跡

SB 258建物跡 調査区北東部の整地層D 上面で検出した南北2間、東西2間以上の建物跡で、西側柱列はSD 315溝跡と重複関係があるため不明である。重複関係より、SB 259建物跡より新しい。建物の方向は東側柱列でみると北で約4度西に偏している。柱間についてみると、北側柱列で東より2.46m、2.30mを計り、総長については不明である。東側柱列では、柱痕跡のないものもあるが、北より2.38m、2.42mで、総長4.80mを計る。柱穴は、隅丸方形を呈するものと梢円形を呈するものとがあり、規模も40×44cm、32×28cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約16cmである。掘り方埋土は、灰黄褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・小型甕・須恵器杯・甕、丸瓦が出土している。

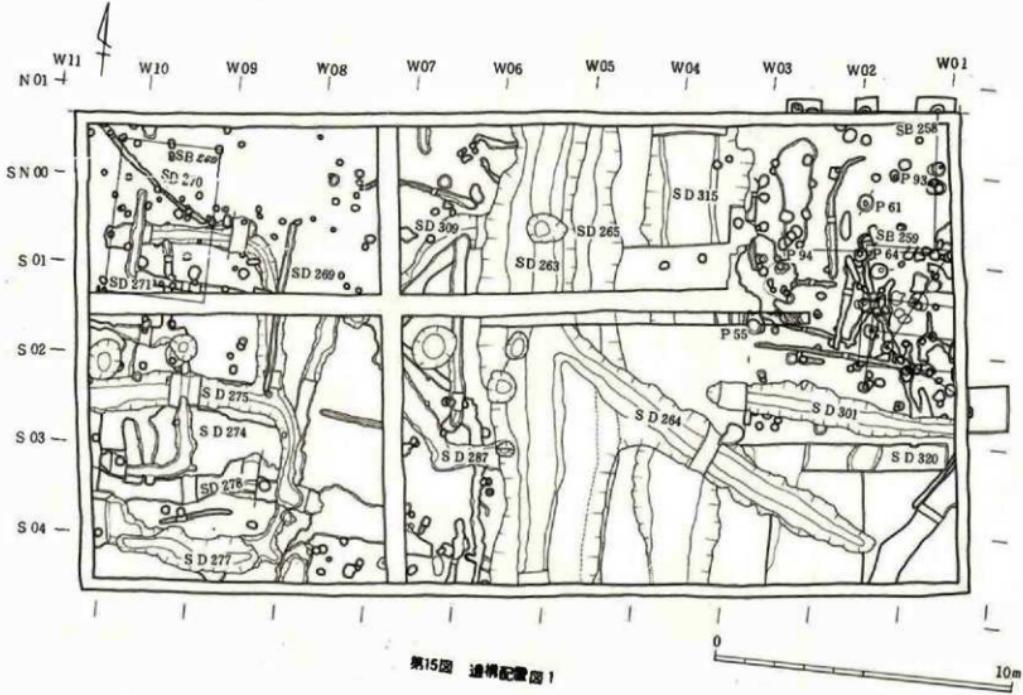


第13図 整地層出土遺物（土器類）



No.	種類	名前	場所	No.	種類	名前	場所
1	砂輪削器	砂輪		11	頂	砂	回転素切り
2	灰粒陶器	灰		12	*	砂	回転素切り
3	*			13	*	砂	
4	赤燒土器	杯		14	*	砂輪器	
5	*			15	*	砂輪底	
6	頂	器		16	*	砂	
7	*	杯	回転素切り・外底斜面「生」	17	*	砂	
8	*	*	回転素切り	18	*	砂	
9	*	*		19	*	砂	外側部へテ箱を「升」
10	*	*					

第14図 整地層出土



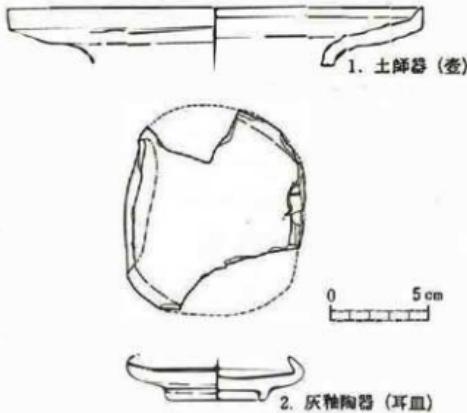
第15図 造構配置図1

SB 259建物跡 調査区東側の整地層D上面で南北2間、東西2間を検出しているが、おそらく東側の調査区外に延びる建物跡である。SB 258建跡、SD 299溝跡と重複関係があり、これらより古い。建物の方向は西側柱列でみると北で約2度西に偏している。柱間は、柱痕跡のないものもあるが、南側柱列で西より1.6mを計り西側柱列では、北より1.98m、2.10mで、総長4.08mを計る。柱穴は、橢円形を呈するものと不整形を呈するものとがあり、規模は前者のもので41×44cmである。柱痕跡は径約16cmである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦の他に円盤状土製品が出土している。

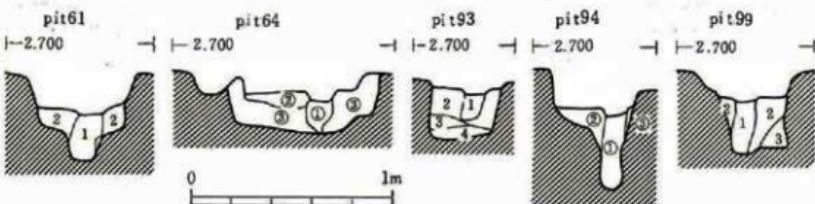
SB 260建物跡 調査区東側の整地層

D上面で検出した南北2間以上、東西1間以上の北側に附がつく建物跡である。S

B 259・261建物跡と重複関係があるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物の方向はほぼ発掘基準線と一致する。柱間は柱痕跡が不明なものがあるが、北側柱列でおよそ1.40m、西側柱列で北側からおよそ1.14m、1.92mを計る。柱穴は隅丸方形のものと橢円形を呈するものがあり規模も35×32cm、42×48cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約15cm



第16図 SB 260建物跡出土



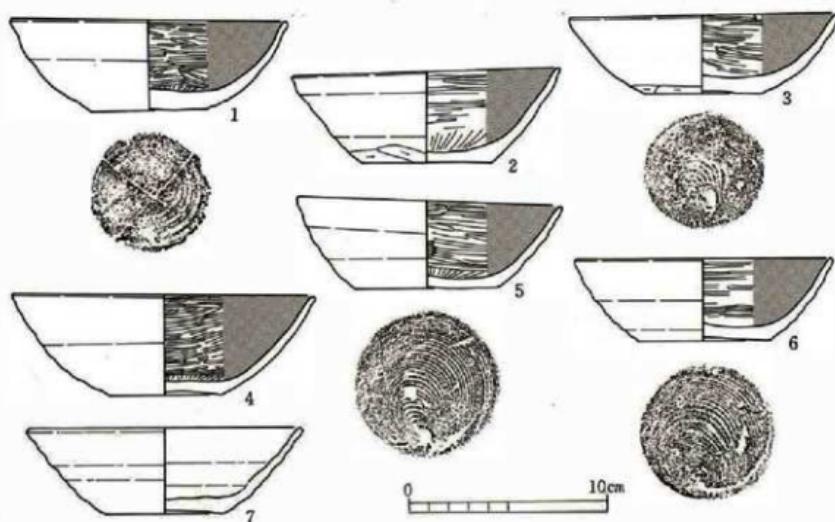
造構	No.	土色	備考	造構	No.	土色	備考	
pit 61	1	10YR 5/4	褐灰色	粘土 地山土性・炭化物質を含む	3	1.5Y 5/2	暗灰黄色	粘土プロックを多量に含む
	2	10YR 5/6	灰黄褐色	粘土 地山土性・炭化物質を含む	4	2.5Y 5/2	黄褐色	シルト 灰成色土を含む
pit 64	①	10YR 5/4	灰黄褐色	SE258pit 94	①	2.5Y 5/2	褐灰色	粘土 地山土性を少しある。また、炭化物質を含む
	②	10YR 5/6	灰黄褐色		②	10YR 5/4	灰黄褐色	粘土 地山土性を含む。また、炭化物質を含む
	③	10YR 5/6	灰黄褐色	SE259pit 99	1	10YR 5/4	灰黄褐色	粘土 地山土性を含む。また、炭化物質を含む
pit 93	1	10YR 5/4	灰黄褐色		2	10YR 5/4	灰黄褐色	粘土 地山土性・炭化物質を含む
	2	10YR 5/6	灰黄褐色		3	10YR 5/4	灰黄褐色	粘土

第17図 柱穴セクション図

を計る。遺物は、土師器杯・甕・瓶、須恵器杯・甕・壺、灰釉陶器耳皿、平瓦・丸瓦が出土している。

SB 261建物跡 調査区東側の整地層D 上面で南北2間、東西2間を検出しているが、おそらく東側の調査区外に延びる建物跡である。S番259・260 建物跡と重複関係があるが、新旧関係は不明である。建物の方向は西側柱列でみると北へ東へ約2度偏している。柱間は柱痕跡が不明なものがあるが、西側柱列で北側よりおよそ1.40m、1.75mを計り、南側柱列では西側よりおよそ1.28m、1.30mを計る。柱穴は、梢円形を呈し、規模は34×42cmである。柱痕跡は径約13cmを計る。掘り方埋土は灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

SB 262建物跡 調査区西側の地山上面で検出した東西2間、南北3間の南北棟の建物跡である。SD 273 溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。建物の方向はほぼ発掘基準線と一致する。柱間については柱痕跡が不明であるが、西側柱列で北側よりおよそ1.92m、1.34m、1.88mを計り、総長は5.14mである。北側柱列では西側よりおよそ1.60m、1.64mを計り、総



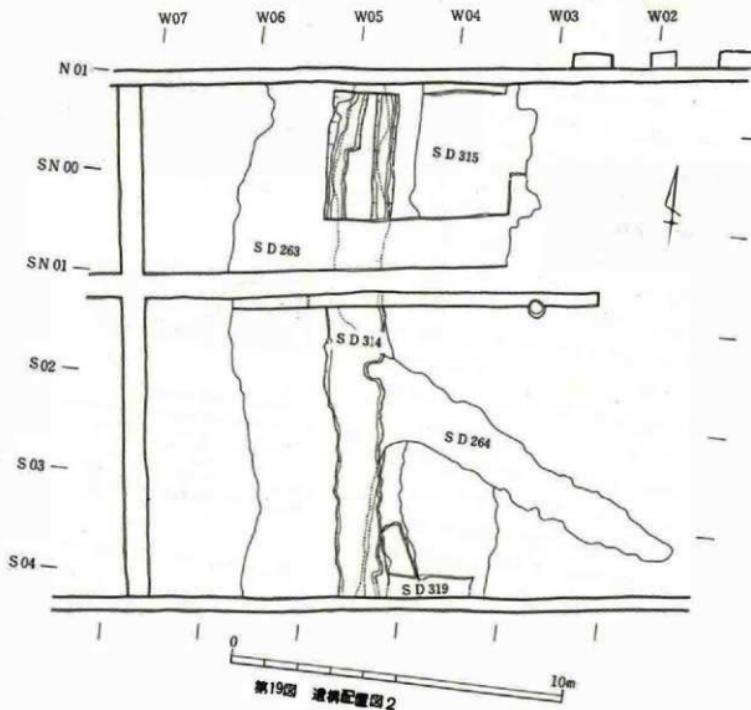
No.	建 物	種類	形態	外観 覚察		内面調査	口径	底径	高さ	備考
				外観	内観					
1	pit55	土師器	杯	ロクロナデ・底部凹凸あり		ヘラミガキ・黑色処理	14.1	6.0	4.6	底部ヘラスリ「メ」
2	+	+	+	ロクロナデ・内縁ヘラズリ・底部凹凸あり	*	*	13.5	6.5	4.6	尖形に近い
3	+	+	+	底部凹凸あり	縫合下端・一部剥離	*	13.7	5.0	3.8	ほぼ完形
4	pit57 瓶口方	土師器	瓶	底部凹凸あり	*	*	15.3	5.7	5.1	
5	p it59	+	+	*	*	*	13.3	7.2	4.9	
6	pit66	+	+	*	*	*	(13.0)	6.7	4.1	
7	pit90	須恵器	+	*	*	ロクロナデ	(14.0)	6.0	4.3	

第18図 柱穴出土遺物

長は3.30mである。柱穴は、隅丸方形を呈するものと横円形を呈するものとがあり、規模は、一辺20×20cmのものや30×20cmのものがあり様々である。遺物は、土師器杯・甕が出土している。

(3) 溝跡

SD 263溝跡 調査区のはば中央で検出した西北に走る溝跡である。検出面は東側で整地層りも新しい。確認できる長さは約16mで、上幅270~380cm、深さ約35cmを計る。埋土は灰黄褐色粘土と黒褐色粘土の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯、平瓦・丸瓦の他に土製カマドが出土している。また、溝跡



第19図 遺構配置図2

の南側より牛の骨が出土している。

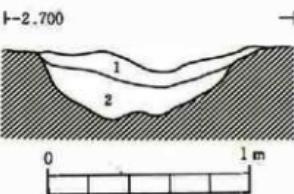
SD 264溝跡 調査区東側で、整地層A上面で検出した斜めに走る溝跡で、西側では、SD 263溝跡と接続する。SD 265溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。長さは約12.5mで、上幅120~180cm、深さ約35cmを計る。埋土は、褐灰色粘土と黒褐色粘土の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・壺・灰釉陶器・平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品や土製カマドが出土している。

SD 265溝跡 SD 263溝跡の東側、整地層A・B上面で検出した南北に走る溝跡である。SD 263・264溝跡と重複関係があり、これらよりも古い。確認できる長さは約16mで、幅については、SD 263溝跡に壊されているため不明である。深さは約20cmを計る。埋土は、暗灰黄色シルトを基調とし、層中には灰白色火山灰が層状に堆積している。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・長頸瓶・赤焼き土器杯・高台付杯・灰釉陶器杯・平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品や土製カマドが出土している。

SD 273溝跡 調査区西側の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側で南へほぼ直角に屈曲し、SD 275溝跡に接続する。

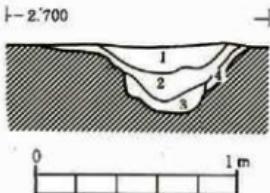
重複関係についてみるとSB 262建物跡、SD 269・271溝跡より古く、SD 272溝跡より新しい。長さは東西方向で約5.5m、南北方向では約4.5m、上幅55~120cm、深さ約35cmを計る。埋土は4層に分けられるが、いずれも灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・壺・平瓦・丸瓦の他に土製カマドが出土している。

SD 275溝跡 調査区南西部の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側においてSD 273・279溝跡と接続する。重複関係からSD 269・274溝跡より古く、SD 276・282・285溝跡より新しい。確認できる長さは約7mで、上幅80~120cm、深さ約25cmを計る。埋土は3層に分けられるが、いずれも灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・壺・丸瓦の他に土製カマドや円盤状土製品が出土している。



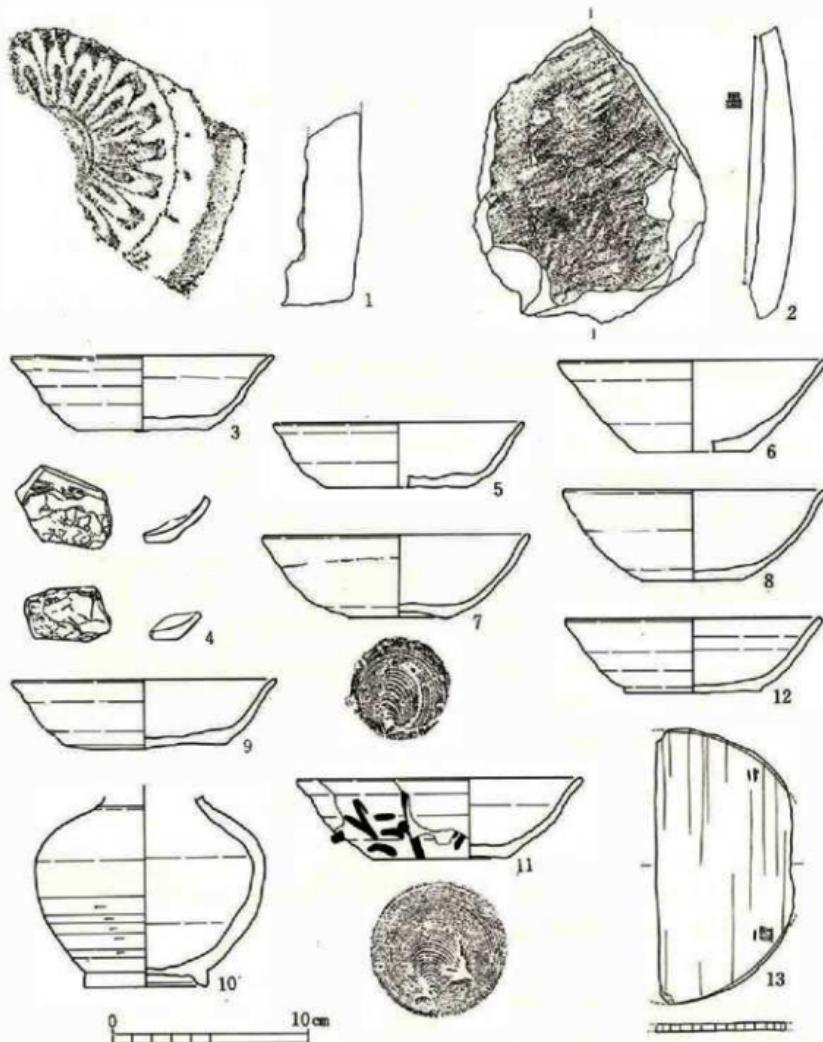
No.	土色	性質
1	IDY R 分離褐色	粘土、透水性、酸化物質、マンガン鉄を含む
2	2.5Y R 黒褐色	粘土、酸化物質がある

第20図 SD 264溝跡セクション図



No.	土色	性質
1	10 YR 4/2 分離褐色	砂質シルト、透水性、酸化物質を含む
2	10 YR 4/4 *	粘土、
3	*	砂質の酸化物質を含む
4	*	砂質シルトブロックを含む
		3層より細かシルトブロックを含む

第21図 SD 273溝跡セクション図



No.	S.D.	地質	形	性	状況	分類別		測定値		備考
						測定値	測定方法	測定値	測定方法	
1	S.D. 263	1層	斜	火	石	火	火	(13.4)	6.7	3.8
2	-	2層	斜	火	石	火	火	(12.6)	7.2	3.3
3	-	3層	斜	火	石	火	火	(5.7)	4.7	
4	-	4層	斜	火	石	火	火	(13.7)	5.0	4.2
5	-	5層	斜	火	石	火	火	13.4	5.2	4.0
6	-	6層	斜	火	石	火	火	(13.3)	6.2	3.5
7	S.D. 263	1層	土	燒	器	火	火	(14.6)	6.3	4.1
8	-	2層	小塊	土	器	火	火	(13.0)	8.0	3.8
9	S.D. 267	3層	土	燒	器	火	火			
10	-	-	火	燒	器	火	火			
11	S.D. 271	1層	土	燒	器	火	火			
12	S.D. 272	1層	土	燒	器	火	火			
13	-	2層	土	燒	器	火	火			

第22図 SD 263・265・267・271・272満跡出土遺物

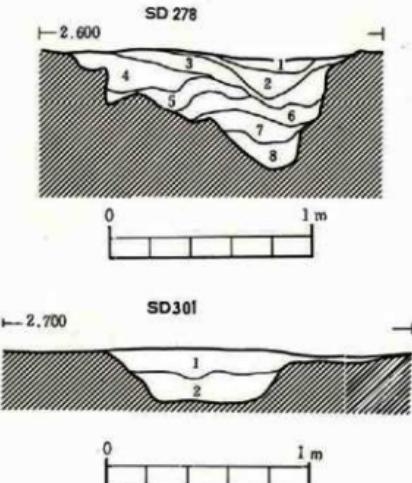
SD 276溝跡 調査区西側の地山上面で検出した南北に走る溝跡である。SD 279溝跡と重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは約6m、上幅約70cm、深さ15cmを計る。埋土は灰黄褐色の粘土質の単層である。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・高台付杯・壺・壺、赤焼き土器杯が出土している。

SD 277溝跡 調査区南西部の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側においてSD 279溝跡と接続する。SD 278溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。確認できる長さは約6.5m、上幅100~170cm、最も深いところで約30cmを計る。埋土は灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・高台付杯・壺・壺、赤焼き土器杯、平瓦の他に土製カマドが出土している。

SD 278溝跡 調査区南西部の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡である。重複関係からSD 274・279溝跡より古く、SD 283溝跡より新しい。確認できる長さは約8mで、上幅は広いところで約160cm、狭いところでは約55cm、深さは約55cmを計る。埋土は8層に細分されるが、黄褐色・灰黄褐色・黒褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・壺、赤焼き土器杯、丸瓦の他に土製カマドが出土している。

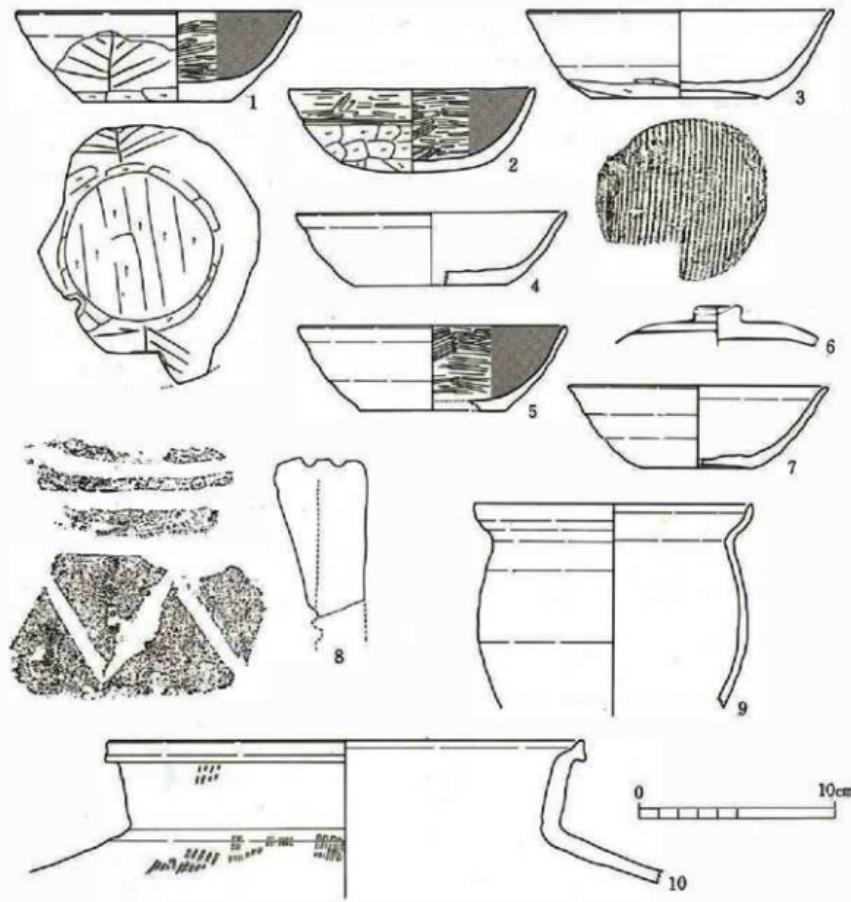
SD 279溝跡 調査区南西部の第VI層上面・地山上面で検出した南北に走る溝跡で、北側でSD 275溝跡と接続し、南側においては幅が狭まりSD 277溝跡と接続する。SD 276・278溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。長さは約6mを計り、上幅は広いところで約95cm、狭いところで約45cmで、深さは約20cmであるが、幅の狭いところでは約5cmと浅くなる。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・壺、平瓦が出土している。

SD 301溝跡 調査区東側の整地層D上面で検出した東西に走る溝跡である。確認できる長さは約8.5mで、上幅65~130cm、深さ約30cmを計る。埋土は、整地層2と非常に類似する黒褐色のシルト質と黒褐色の粘土質が堆積している。遺物は



層構造名	層序	土壤	特徴
SD 278	1	10YR 5/4-7/4 黄褐色	地上・地山上面を含む、粘土質・マジン性を含む
	2	10YR 5/4 黄褐色	粘土
	3	10YR 5/4 黄褐色	粘土質泥炭をブロック状に含み、マジン性を含む
	4	10YR 5/4 黄褐色	粘土質土を含む
	5	2.5Y 4/4 (こい) 黄褐色	粘土質シルト・粘土質土をブロック状に含む
	6	2.5Y 4/4 黄褐色	粘土質土を含む
	7	2.5G 7/4-7/4 黄褐色	シルト・粘土質土をブロック状に含む
	8	2.5G 7/4 黄褐色	粘土・シルト・粘土質土を含む、マジン性を含む
SD 301	1	10YR 5/4 黄褐色	シルト・粘土質土を含む、マジン性を含む
	2	10YR 5/4 黄褐色	粘土・粘土質土を含む、粘土質・マジン性を含む

第23図 SD 278・301溝跡セクション図

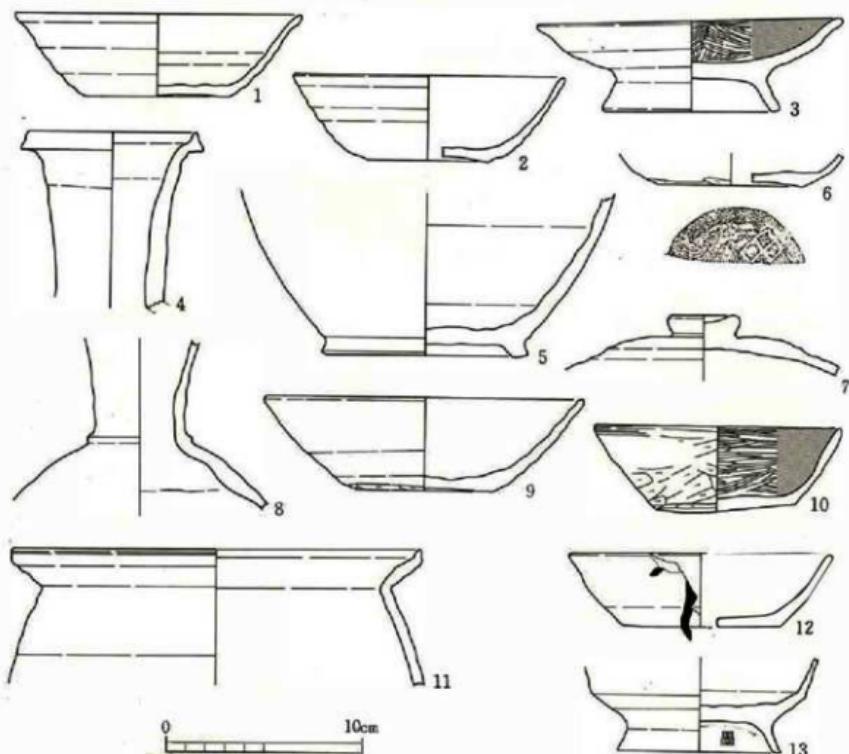


No.	遺構	層位	地點	器形	外面調査	内部調査	口径	底径	高さ	備考
1	SD 309	2層	土師器	杯	口2.6ナメ・底部下端~底部中央へラテナリ	ヘラミガキ・黑色处理	(14.6)	4.6	7.6	2段位置にヘラミガキ
2	"	"	"	"	コロナナジ・ヘラミガキ・手縫ひタケナリ	"		12.6	4.2	
3	"	"	須恵器	"	コロナナジ・通體磨光無地引手縫ひヘラミガキ	ロクロナナジ	(15.6)	5.9	4.4	須縫引
4	"	"	"	"	通體磨光手縫引	"		(13.9)	(7.5)	3.7
5	SD 314	1層	土師器	"	通體磨光手縫引	ヘラミガキ・黑色处理	(13.8)	(7.5)	4.3	
6	"	"	須恵器	蓋	圓筒ヘラミガキ	ロクロナナジ				
7	"	"	"	杯	底部切欠ヘラミガキ	"	(13.2)	5.5	4.2	
8	"	"	軒平瓦	"	瓦当面二重墨文 瓦面墨文					
9	"	"	土師器	甕	ロクロナナジ	ロクロナナジ		14.2		
10	"	"	須恵器	"	ロクロナナジ・手縫印手縫印	手縫印文2箇 おもてのちナ		(24.5)		

第24図 SD 309・314溝跡出土遺物

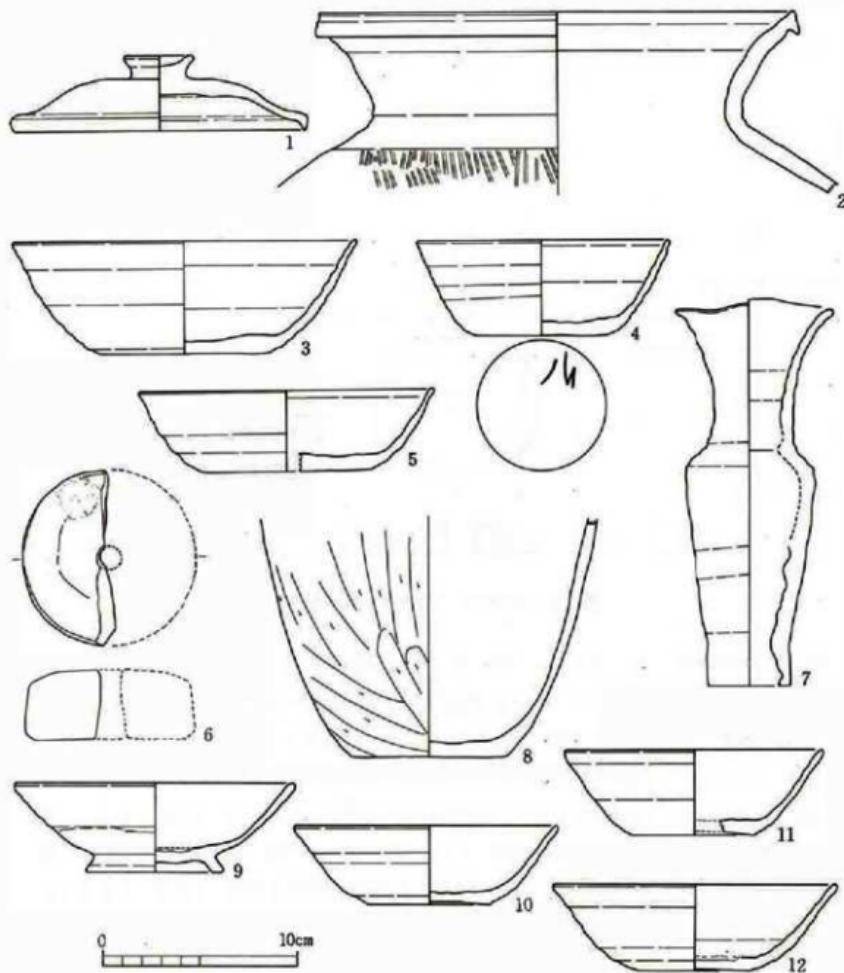
土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺・長頸瓶・赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦・丸瓦の他に木製品の盤や土製カマドが出土している。

SD 314溝跡 調査区のはぼ中央部、地山上面で検出した南北に走る溝跡である。確認できる長さは約9.5m、上幅約160cm、深さ約20cmを計る。埋土は、単層で黄灰色の粘土質が堆積する。



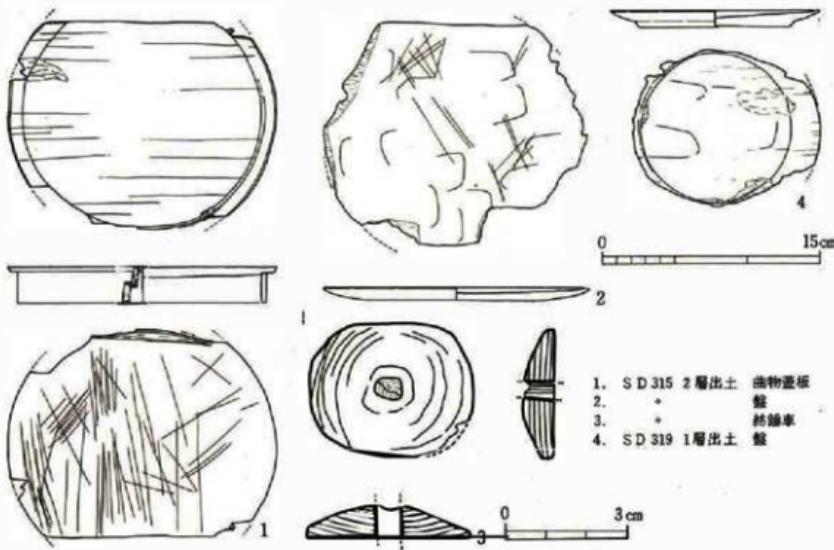
No	遺構	部位	種類	形態	外表面性状	内部調整	口径	底径	高さ	備考
1	SD 315	1層	須恵器	杯	ロフロナデ 錐部回転へラ切り 底部回転舟切り	ロクロナデ +	(14.6)	7.3	4.2	
2	"	"	"	"	"	"	(13.5)	8.2	4.3	
3	"	"	土師器	高台付皿	"	ヘタミガキ・黑色処理	15.4	9.0	4.6	完形
4	"	"	須恵器	長頸瓶	"	ロクロナデ (9.3)	"	"	"	
5	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
6	"	2層	"	杯	直筒形斜面舟切り、底 舟へラケズリ	"	"	"	"	
7	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
8	"	"	"	甕	"	"	"	"	"	
9	"	"	"	杯	桂形の縦手筋へラク スラスラ舟側斜面へケツ	"	16.2	7.0	4.7	
10	"	"	土師器	"	ミコナデ 持手へラケズリ	ヘタミガキ・黑色処理	12.5	7.0	4.3	
11	"	"	"	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	"	"	"	
12	"	3層	須恵器	杯	ロフロナデ 底部回転へラ切り 回転へラケズリ	"	(13.3)	(8.0)	3.7	井伊御器部口井伊御器 外部品付着
13	SD 320	1層	"	甕	"	"	"	"	"	

第25図 SD 315・320溝跡出土遺物



No.	通期	形名	縁型	縁状	外表面特徴	内底面特徴	口径	底径	高さ	備考
1	S.D. 277	2等	直唇口	直	ロクロナダ	ロクナダ	14.8		3.8	
2	*	*	*	*	手行押捺	*	(24.0)			背後适当異質
3	*	*	*	杯	底部回転へき切りのちナダ	*	(17.5)	8.8	5.7	
4	S.D. 278	*	*	*	底部回転へき切り	*	12.8	6.6	4.8	外底飾器有「□」
5	S.D. 279	*	*	*	*	*	(15.8)	(8.7)	4.1	
6	*	*	石器品	切妻	後(6.8)cm 厚さ 3.5cm					
7	S.D. 283	1等	直唇口	直	ロクロナダ 底部回転へき切り	ロクナダ	8.0	(4.2)	19.5	口縁歪む
8	S.D. 293	*	土附口	腹	手持ヘラカズリ 底部ナダ	ナダ			7.9	
9	S.D. 301	*	直唇口上唇	直切	ロクロナダ 底部回転へき切り	ロクロナダ	14.3	7.1	4.5	
10	*	*	直唇口	直	*	*			13.4	6.2 4.0
11	*	*	直唇口	直	*	*			(13.2)	(6.2) 4.3
12	*	2等	*	*	*	*			(14.4)	5.7 4.4

第26図 溝塗出土遺物



第27図 SD 315・319溝跡出土木製品

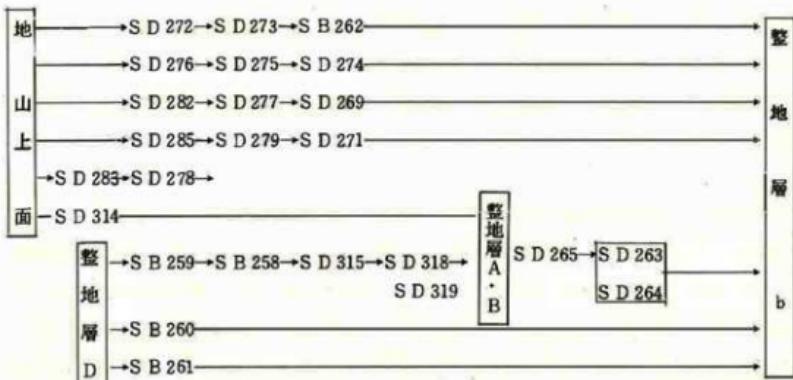
遺物は、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・長頸瓶・軒平瓦・平瓦・丸瓦、円盤状土製品、土製カマドがあり、木製品では下駄や曲物の底板が出土している。

SD 315溝跡 SD 314溝跡の東側、整地層D上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係についてみると、S B 258達物跡やSD 318溝跡より新しく、SD 319溝跡よりも古い。確認できる長さは約16mで、上幅約2.20m、深さ約60cmを計る。埋土は、黒褐色・暗灰色・灰オリーブ色の3層に分かれる。遺物は、土師器杯・高台付杯・高台付皿・甕・須恵器杯・高台付杯・双耳杯・蓋・甕・長頸瓶・縁釉陶器・平瓦・丸瓦・軒用瓦・円盤状土製品、土製カマドがあり、木製品では盤・曲物・杭などが出土している。

IV まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡5棟、溝跡57条、土塙1基、整地層、水田跡の他に多数の小柱穴が検出された。ここでは主な造構についてのみ記述することにする。

発見された造構は、検出面の相違と重複関係からまとめるところとなる。



以上のように、各遺構は整地層を介在して重複している。ここでは、各遺構群の年代について検討する。

はじめに、調査区全域をほぼ覆っている整地層 a・b の年代について検討し、これより下層で検出した遺構の下限年代を与えておきたい。整地層 a・b より出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。土師器杯はロクロ使用のものであり、表杉ノ入式の範疇に属するもので、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分で、他に底部全面を手持ヘラケズリを施しているものがみられる。須恵器杯は、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切りの後ナデ調整を施しているものが大部分を占めている。赤焼き土器は、多賀城跡出土土器のうちF群土器の須恵系土器に対比されるもので、F群土器は10世紀中頃の年代が与えられている（註2・3）。または、10世紀前半に焼成したと考えられている灰白色火山灰が、層中にブロック状に含まれている。したがって、整地層 a・b の年代は、おおむね10世紀中頃と考えておきたい。

整地層 A・B 上面で検出した遺構群は、出土した遺物から検討してみると土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器が出土しており、土師器杯は、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分であり、須恵器杯についても回転糸切り無調整のものが主流を占めている。また、S D 265溝跡の層中に灰白色火山灰が自然堆積していることより、整地層 A・B 上面で検出した遺構群の年代は10世紀前半と考えられる。

整地層 D 上面で検出した遺構群から出土した遺物から検討してみると、土師器、須恵器が出土しており、土師器杯はロクロ使用のもので表杉ノ入式の範疇に入るものである。須恵器杯はロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが大部分である。また、確実に奈良時代にまで遡る遺物が出土していないことより、おおむね9世紀と考えておきたい。

地山上面で検出した遺構群から出土した遺物をみると、土師器、須恵器、赤焼き土器が出土しているが、赤焼き土器は、整地層a・bと類似する埋土から出土しており、整地事業を行った際に混入したものと思われる。土師器、須恵器については、整地層D上面で検出した遺構から出土する遺物と同じ傾向を示していることより、おおむね9世紀から10世紀初頭と考えておきたい。

本調査区は、第5次調査区の北側に隣接しており、第5次調査で発見された整地層a・bは本調査区まで延びており、本調査の整地層a・bに対応する。また、SD03・04溝跡も今回検出したSD263・265溝跡と同一溝跡である。さらに基本層位をみると、第5次調査(註4)で出された第VIa層・第VIb層は、第V層の上部と下部に対応し、第VI層は第VI層に対応する。

今回の調査では、水田として利用していた地域に整地事業を行い居住空間を広げて生活の場として利用したことが明らかになった。

(註)

- 註1 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書 (1985)
- 註2 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所 (1980)
- 註3 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政庁跡本文編」(1982)
- 註4 註1に同じ

(引用・参考文献)

- 1 多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第3集 (1982)
- 2 * 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第4集 (1983)
- 3 * 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第5集 (1984)
- 4 * 「市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第13集 (1987)
- 5 宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」多賀城跡調査研究所年報1973 (1974)
- 6 * 第37次発掘調査 多賀城跡調査研究所年報1980 (1981)
- 7 宮城県教育委員会「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集 (1982)
- 8 田中創和他「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集 (1984)
- 9 吉岡恭平他「高速鉄道関係遺跡調査概報V」仙台市文化財調査報告書第89集 (1986)
- 10 八賀晋「古代における水田跡開拓—その土壤的環境」『日本史研究』96 (1968)

V プラント・オパール分析調査報告

古環境研究所

1. 試 料

水田耕作土と見られていた土層は、C-10地点のV_a層とV_b層（註）、およびF-02地点のVI層である。分析試料は、これらの層について容量50mlの採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。

2. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図2に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

3. 考 察

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

平安時代の水田耕作土と見られていた、C-10地点のV_a層とV_b層、およびF-02地点のVI層について分析を行なった結果、全試料からイネのプラント・オパールが検出された。

このうち、C-10地点のV_a層では、密度が8,300個/gとかなり高い値である。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。C-10地点のV_b層およびF-02地点のVI層では、密度がそれぞれ2,400個/gおよび3,200個/gとやや低い値である。したがって、これらの層で稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

（註）V_a層とV_b層は基本層位の第V層にあたり、V_b層は、第V層の下部にあたる。

表1 プラント・オパール分析結果

多賀城市 市川橋遺跡

F-02地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7	40	20	0.80	3,200	5.15	4,900	10,700	0	0

C-10地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
6a	45	15	0.78	8,300	9.89	5,000	28,300	0	0
6b	60	12	0.87	2,400	2.47	1,600	13,000	0	0

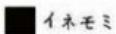
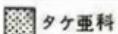
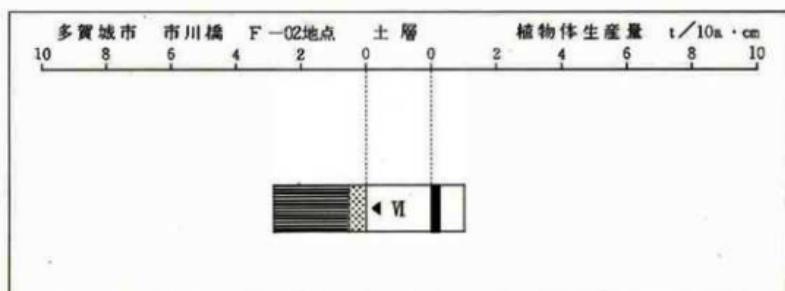
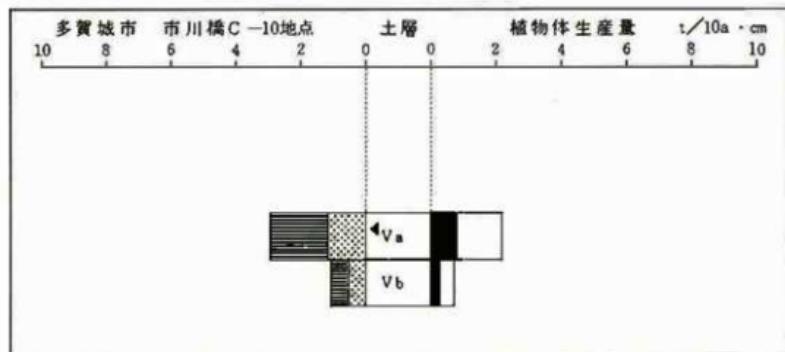


図1 おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◆印は50cmのスケール

図版 1

整地層上面全景
(西から)



図版 2

SD 263・264溝跡
(北から)



図版 3

通構全景
(西から)



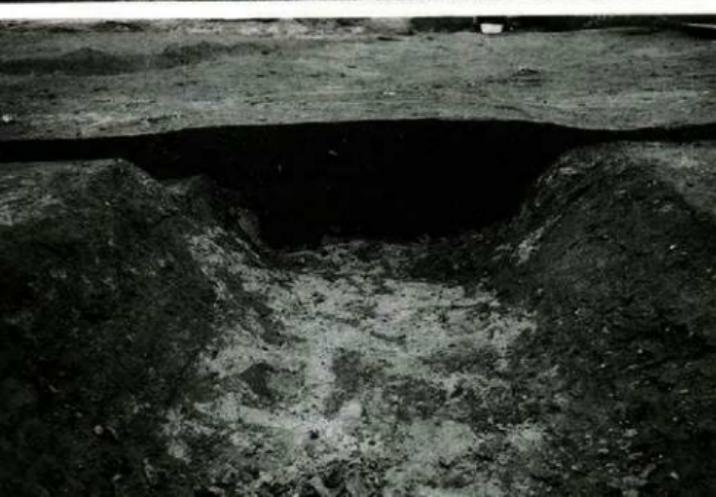
図版4
調査区東側造構全景
(南西から)



図版5
調査区東側造構全景
(北から)



図版6
SD 301溝跡
(東側から)



図版 7
SD315溝跡断面



図版 8
SD283溝跡
(西から)



図版 9
pi t55遺物出土状況
(北から)



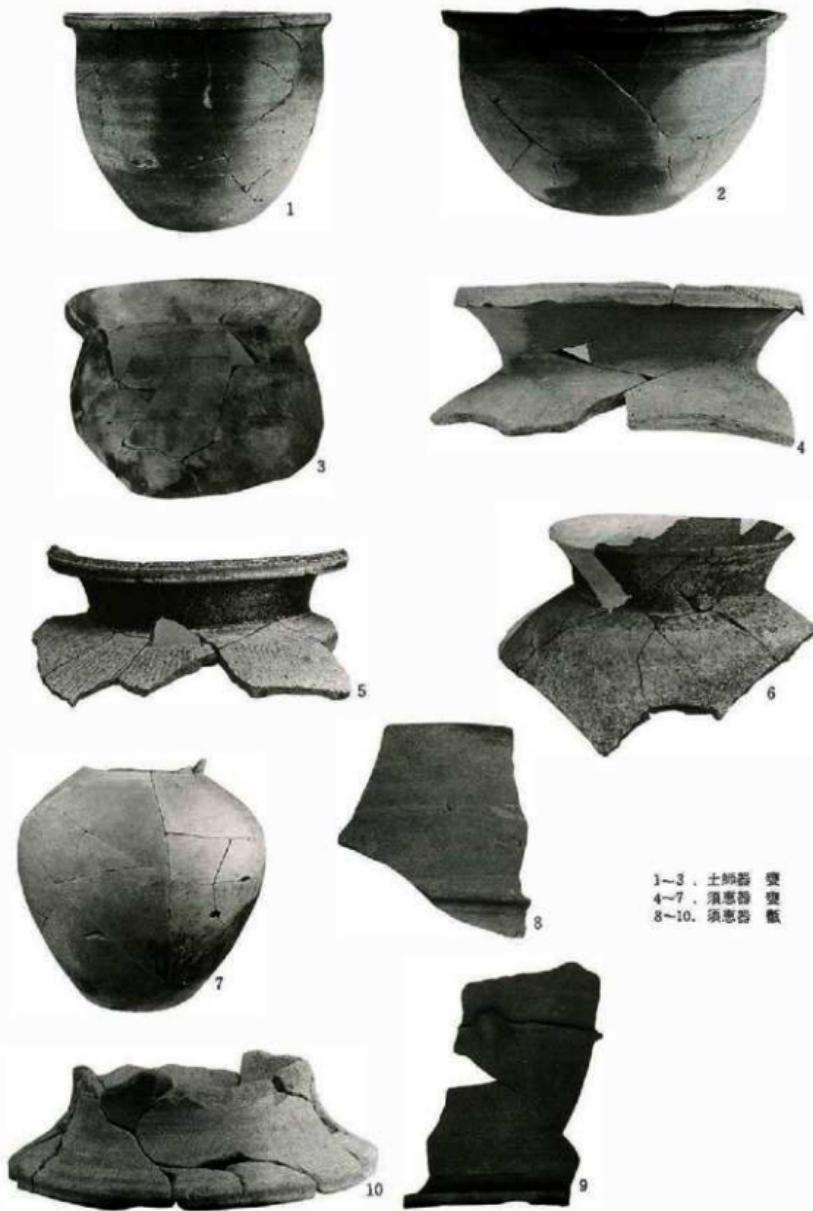


1~8. 須恵器 杯
9~13. 土師器 杯

圖版10 出土遺物



1. 土師器 杯
 2・3. 赤焼き土器 杯
 4. 赤焼き土器 高台付杯
 5. 土師器 台付皿
 6～8. 須恵器 釜
 9・10. 須恵器 長脚瓶
 11. 須恵器 帽瓶



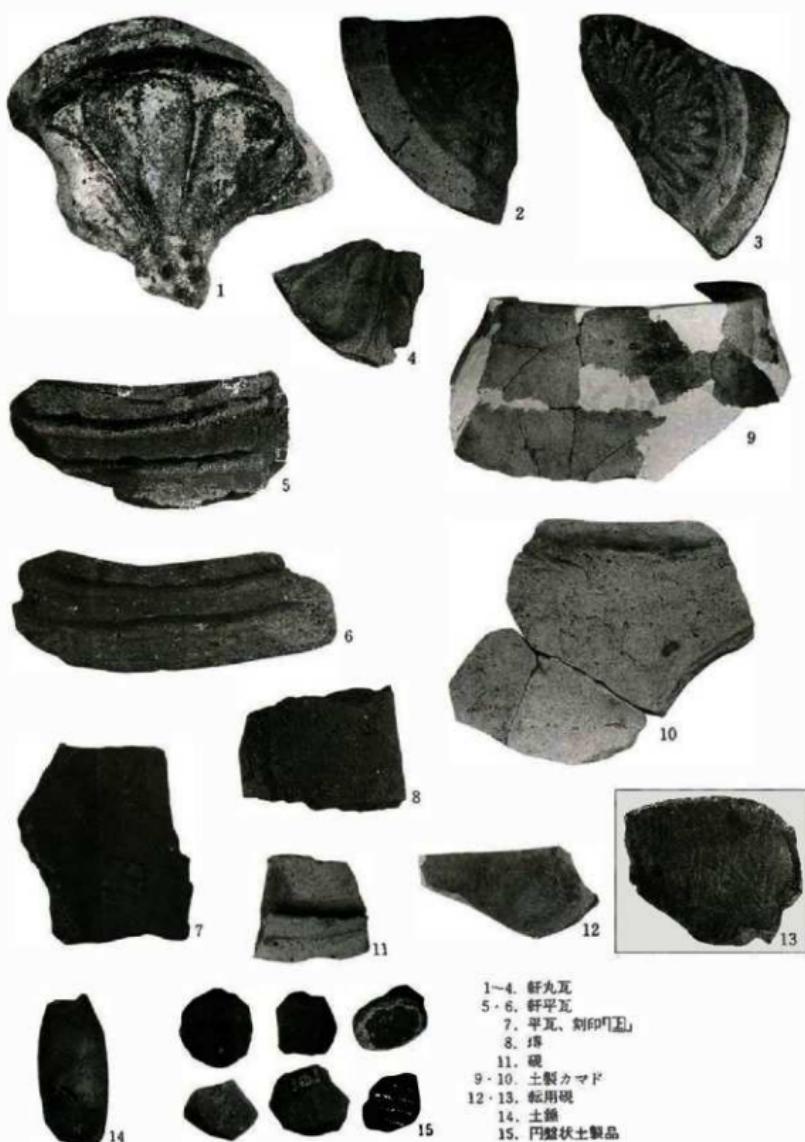
1~3. 土師器 瓢
4~7. 須惠器 瓢
8~10. 須惠器 盆

圖版12 出土遺物



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 幽陶器 杯底 | 6. 幽陶器 碎片 |
| 2. 幽陶器 桶 | 7. 幽陶器 碎片 |
| 3. 幽陶器 耳 | 8. 土器器 杯 |
| 4. 幽陶器 盆 | 9. 土器器 杯 |
| 5. 幽陶器 盆 | 10~15. 土器器 杯 |
| | 16. 土器器 杯 |

圖版13 出土遺物



图版14 出土遗物

- 1~4. 瓢丸瓦
- 5~6. 瓢平瓦
- 7. 平瓦、刻印瓦
- 8. 砖
- 9. 研
- 10. 土製カマド
- 12~13. 車用硯
- 14. 土鏡
- 15. 円盤状土製品

多賀城市文化財調査報告書第24集
市 川 橋 遺 跡
平成元年度発掘調査報告書

平成2年3月31日 発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発 行 多賀城市中央二丁目27番1号
電 話 (022) 368-0131~4
印 刷 (有)伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目1番7号
電 話 (022) 362-0805